

浅野誠沖縄シリーズ2.

生活・集落・ 文化芸能・自然 2006-2010

「シリーズ1. 沖縄」から続くものだ。経緯については、同書を参照していただきたい。
なお、各記事タイトルの次に記された年月日は、ブログ掲載日である。

目次

21. 生活

戦後沖縄における人口概況と移民・移住、暮らし、産育・教育など
平均県民所得400万円の世界と200万円の世界
『おきなわ軽便鉄道マップ』（ボーダーインク社2008）を読む

4
5
5

1

「県人口ピークは2010年ころに早まる」という新聞報道	6
沖縄メディカル病院での人間ドック	6
「社会を明るくする大会」	7
戦前沖縄の人口 若林啓子「沖縄の人口問題」本を読む1	7
戦後沖縄の人口 県外流出 U・Iターン 若林本2	8
沖縄の合計特殊出生率の高さなど 若林本3	9
中年の死亡率 国際結婚など 若林本4	10
日本の貧困率 子どもの貧困 沖縄の場合	11
日本の貧困率 沖縄の場合 その2 生活費・教育費	12
日本の貧困率 沖縄の場合 その3 多様な文化の豊かさ	13
子どもの貧困 沖縄の場合 その4 人間関係の豊かさ	14
日本の貧困率 子どもの貧困 その5 子どもの仕事	15
暮らし つながり 千葉大学学生の礼状に見る沖縄印象3	15
まぼろしの泡波をいただく	16

2.2. 集落

集落の暮らしと組織の変化	17
沖縄のムラの共同性 琉球大学本コメント	19
『集落が消えていく』報道 なぜ沖縄は少ないのか	19
安里英子『沖縄・共同体の夢——自治のルーツを訪ねて』を読む	20
山城千秋『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』を読む1	21
「シマ」・「青年会」・沖縄研究・文化伝承への視点 山城本2	22
シマ社会と青年会 山城本3	24
山城本4 伝統芸能の継承と文化創造 共同性の視点から	24
山城本5 浦添市内間青年会の事例検討	26
山城本6 技能 個人 地域社会 伝承	27
山城本7 沖縄文化の創造 研究のさらなる発展への期待	28
すごい蓄積と示唆が多い「沖縄の字公民館研究」報告書	29
字公民館本2 シマの歴史的变化とのかかわり	29
字公民館本3 地域福祉と字公民館	31
字公民館本4 青年会 伝統芸能 地域激変と「はみ出し者」	32
字公民館本5 青年・青年会 就職・自立 Uターン 沖縄おこし	33
字公民館本6 字誌とフランスの共同的生活史	34
字公民館本7 字誌 個人 共同体と結社	35

字公民館本8 集落(字)育英奨学活動	37
字公民館本9 シマ起こし 私の個人的関心 スーマチ	38
松田武雄『現代社会教育の課題と可能性』を読む	39
続 松田本 地域づくり・公民館と社会教育	40
松田本3 公民館・社会教育を共同の地域づくりのなかで考える	42
『おきなわの社会教育』(エイデル研究所2002年)を読む1	43
沖縄の社会教育のメッセージ 『おきなわの社会教育』本2	44
芸能 学校 『おきなわの社会教育』本4	46
字評議員になって半年 畑地かんがい 行政事業の流れの変化	47
読谷村座喜味の字誌を読む	47

23. 文化・芸能

沖縄県立博物館・美術館訪問	49
ウチナーグチ抑圧とウチナー音楽隆盛	49
クイチャー	50
奄美一沖永良部一沖縄の歌・踊り 「踊り手」と「観衆」	51
矢野輝雄「沖縄芸能史話」(榕樹社1993年)を読む	52
庶民参加による芸能創造 「沖縄芸能史話」続き	53
組踊観劇	53

24. 自然

沖縄は気圧が低くて、自律神経失調症にいい 琉球大学本3	55
難しいが、たいへん示唆に富む自然関係論文 琉球大学本5	55
安仁屋洋子『沖縄薬草と抗酸化作用』 琉球大学本6	56

21. 生活

戦後沖縄における人口概況と移民・移住、暮らし、産育・教育など

(2007年7月25日)

――これは、4月はじめに作成したものであるが、不十分で推敲の必要を感じ、しばらく放置していたが、推敲の時間のゆとりがとれないので、そのまま掲載することにする。したがって、不十分な点が多いことを了解されたい。

戦争直前に70万近くあった沖縄人口は、戦争により激減する。ことに島尻地域の村々は大量の死者を出す。玉城では、戦後の収容所が置かれたこともあって、ねこそぎの人口移動を体験する。

その後しばらくして、戦後のベビーブーム時代を迎える。1960年代にいたると、沖縄県全体で人口は80万になり、玉城も10000人に近づく。中山集落でも、戦争で50人以上の死者（平和の礎で私が数えた数）を出す。その後急速に人口回復し、おそらく戦前以上の300人くらいの人口になったであろう。

※ 中山は、私が住んでいる集落のことだ。

しかし、1960年代に至ると、都市への移動が広がる。離農し、仕事をもとめて都市に移住するのである。当時の玉城は那覇などの都市へと通勤できる圏内にはなかった。また、若者のなかには本土就職するものも大量に生まれてくる。そうした移住・就職を考えて、高校以上への進学が急激に広がっていく。

「復帰」以降の1970年代の人口概要は、以下のようである。

	沖縄県全体	玉城	中山
1970年代	100万	10000	250
1980年代	110万	10000	240
1990年代	120万	10000	230
2000年代	130万	10000	220

学力問題

戦前 「徴兵制」とからんで登場

戦後1950年代 教育界内部から登場 一部マスメディアからも登場。

1970年代後半 財界から登場 産業主義開発主義が特徴

1980年代末～90年代 県をあげての「学力向上運動」 どれだけの浸透度があったかどうかは別にして、タテマエとして、各自治体の地域住民組織も動員

平均県民所得400万円の世界と200万円の世界（2008年2月10日）

最近の報道によると、東京の平均県民所得は四百数十万円でトップ、愛知が二位で、400万円近く、沖縄は最下位でほぼ200万円。そして格差は開いているという。

私自身は、数年前まで愛知に住んでいて、今沖縄に住んでいる。この両者の世界を実体験している。

この違いをどう見るのか。いろんな見方がある。そのなかでの一つの見方は、世界的レベルで考えるもので、世界的レベルでみると、もっとも高いレベルに日本はあり、そのなかでも東京・愛知はそうである。その意味でいうと、「低すぎる」というよりも、「高すぎる」という見方が成立する。そしてまた、日本のなかでの格差を世界のなかでの格差のなかでどう見るかという問題も生じる。

また、商品依存度もからんでくる。また、商品以外の豊かさがどうなっている、ということもからんでくる。

愛知から沖縄に戻ってきて、私のまわりの身近なところで、多くの人が200万円以下で暮らしていることをじかに見るようになった。世界的レベルから見れば、それでも豊かであるが、他面大変な困難に直面している。象徴的なのは、大学進学にかかわって見られる。200万円の所得では、子どもを大学進学させることは不可能に近い。その反面、私のような田舎暮らしのものにとって日常生活費ということである、商品への依存度が低いので、「月10万円で暮らせる町・村」番組で取材を受けたような生活は可能である。

そんななか、沖縄の若者たちのなかに、高収入を求めて本土にでかけるが、いずれは戻ってきたいと考え、たとえ収入が低くても「地元」で仕事をしたいと考えているものが多い、あるいは最初から県内就職を強く求めるものが多い、ということはどう考えたらいいのだろうか。東京・愛知型を追求して、「格差」を縮小していくのがいいのだろうか、という問いにもなるかもしれない。また、東京などの大都市から若者が大量に沖縄にやってくる。短期間で本土に戻るものから定住にいたるまで多様で、大都市的生活と沖縄的生活の双方のなかでの模索をしているようであるが、そうした若者を、経済的問題として、あるいは生き方の問題として、どう理解したらいいのだろうか。

田舎暮らしを求める、本土からのシニアの方々には、こういう問題をどう考えるのだろうか。沖縄を訪れる観光客の方々はどう考えるのだろうか。沖縄を「消費地」として「愛用」することは、沖縄観光の振興にとってはいいのだけれど、なぜか「沖縄の豊かさが搾取」されているように感じてしまうこともある。私は「生き方」の問題として、移住のみならず、観光もとらえていきたいと思っている。

『おきなわ軽便鉄道マップ』（ボーダーインク社2008）を読む

（2008年8月11日）

おきなわ散策はんじゃ会編のこの本を購入して読む。図版が多い本なので、読むというよりも見るという感じ。軽便に関心をもつきっかけにはいくつかある。一つは、大里にある「かりゆし軽便」という野菜直販店の店名だ。どうして、こういう名前なのかな、と不思議に思っていた。そして、その店近くから、南風原の喜屋武に向けて、交通量が少ないけど、立派な道がぐねりながらあるが、なぜこの道があるのか、ということもある。

その後、それらが軽便鉄道と関係があることを知り、興味が高まり、今回の本に出会う。出版日は8月8日な

ので、出たばかりだ。5人のメンバーが実際に鉄道後を歩いて作成したもので、実際に歩きたくなる本だ。

例の「かりゆし軽便駅」は、糸満線の稲嶺駅の跡ということだ。そして、例の道で、この鉄道の最終時期の昭和19年に大爆発事故があったとのこと。

糸満線が、那覇からまっすぐ南下するのではなく、稲嶺まで経由して、大きく曲がる理由は、有力県議会議員のかかわりがあるらしい。玉城奥武出身議員の大城幸之一氏の名前をとって、例の道の喜屋武近くのカーブが「幸之一カーブ」と呼ばれてきたとのこと。

それにしても、鉄道がいつか復活することを期待したい。

「県人口ピークは2010年ころに早まる」という新聞報道（2008年11月28日）

24日の琉球新報によると、沖縄国際大学の富川教授の研究発表では、沖縄県の人口ピークは従来の見通しより15年早まるということだ。

2006、2007年に、県外への転出人口が転入人口を逆転したが、その人口流出が拡大するという前提での推定だとのこと。その背景には、沖縄の高失業率によって他府県への労働力流出が増大しているとのこと。とくに「東京一極集中」にともなう影響が指摘されている。

私たちが沖縄に戻ってきたころには、本土から沖縄への社会増の多さ、つまり沖縄移住の多さが話題になっていたが、2006年以降、それ以上に沖縄から他府県への社会増が多くなっているようだ。

その意味では、ますます沖縄起こし、地域起こし、仕事起こしが重要なことになっているといえよう。と同時に、田舎暮らし、スローライフ、ロハスといった方向への考えを深めていく必要があるともいえよう。

沖縄メディカル病院での人間ドック（2009年6月16日）

私が加入している南城市の国民健康保険がおこなう人間ドックに行ってきた。

いくつかの病院から選択できるのだが、一番近い市内の沖縄メディカル病院に三年連続通っている。市外の大きな病院もいくつか選択肢にあるが、地元優先ということもあるし、大きくない病院の方が「手作り感」があっていいと思うからだ。

しかも、私はできるだけすいている日を選んで予約する。ということで、今回、私一人で「楽しむ」。じっさい、医師・看護師・検査職員と、いろいろなことで話をする。職員も当然地元の人が多いので、盛り上がったたりする。医師にも、関心ごとを尋ねて、ていねいに教えてもらう。

愛知にいた数年前までの病院風景とは全く違う。大きな病院は、どうしても「大量処理的」雰囲気になりやすいのだろう。

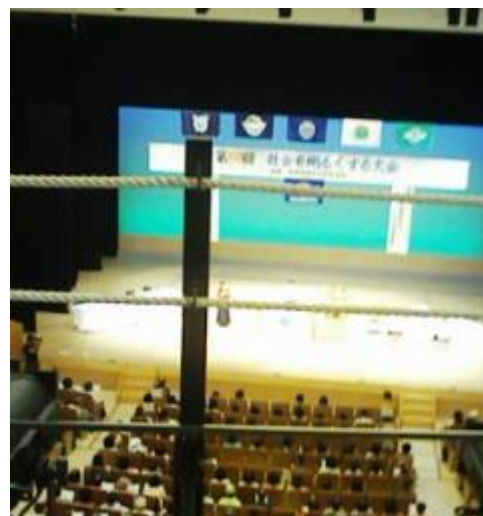
人間ドックは、私にとって、体の気づきを与えてくれ、健康回復のきっかけをつくってくれる。昨年も逆流性食道炎が悪化していることをきづかせてくれた。お陰で、一年間の服薬をへて、かなりよくなり、今日、医師が

服薬をやめてもいいといってくれた。詳しい結果がでるのに一か月かかるが、今日の段階でも、いくつか役立つ発見のあるドックとなった。全体的には、体調は良くなっているようだ。

「社会を明るくする大会」(2009年7月9日)

浦添のティダコホールで開かれた、「犯罪や非行のない明るい社会を築こう」という大会に参加。

中学生小学生による演劇があるので、ぜひ見に来てほしいという誘いがあり参加。



戦前沖縄の人口 若林啓子「沖縄の人口問題」本を読む1 (2009年10月13日)

本の名前は、若林敬子「沖縄の人口問題と社会的現実」(東信堂2009年)だ。かねてから、沖縄の人口問題に関心をもっていたが、その作業がよりかかることのできる専門書がなくて、どうアプローチしていったらよいか困っていたときに、好都合の本が出た。

教育問題の背景に人口問題が存在していることは、フランスの社会史に触発を受けつつ展開した、中内敏夫さんなどの教育の社会史を研究する人たちによって、多くの問題提起が出されている。

私の『沖縄県の教育史』(1991年思文閣)も、それらの刺激は受けているが、本格的作業になってはいない。今後、地道な作業をしていきたいと思う。その際、いろいろと考えていくためのデータを、人口問題の素人でもアプローチしやすい形で提供しているこの本は一つの足がかりになろう。

そこで、この本が与えてくれた考えたい問題を列挙したい。まず戦前の沖縄についてだ。

1) まず、この本ででているデータをおおまかに紹介し、本の中の多少のコメントを付け加えておこう。

一八八〇年 三一〇五四五人

一九二〇年 五七一五七二人

一九二五年 五五七六二二人 ソテツ地獄・出稼ぎ移民などの社会増減率10.3%

一九四四年 五九〇四八〇人

一九四五年 三二六六二五人 戦争

一九五〇年 六九八八二七人 うち十万人海外植民地からの復員・引揚者

P 4~5

2) 「沖縄県の人口は、人口動態からしても人口移動の視点からみても、きわめて特異な推移を示し、日本の人口問題史を考える上で多くの興味深い問題提起を示してくれる。まず戦前の沖縄人口は約五五~五九万人程で長期

に維持され、年平均増加率は1%未満にとどまる。これは戦前の沖縄の出生率は全国平均を下まわり、かつ海外移民や本土出稼ぎという人口流出・社会減が著しくみられたことによる。」 P 4

3)「戦前の沖縄の出生率(平均25.0%)は一貫して全国平均を下回っている。こうした相対的低水準は、医療や公衆衛生・栄養の劣悪な環境に加え、(中略)男子人口の単身による本土出稼ぎや海外移民という再生産年齢人口の現有に大きな性差があったことが要因している一つと考えられる。」 P 6

「1925年 男9097人 女10829人、計2万人の沖縄県人(当時の県人口55.7万人)、本土出稼ぎには特に阪神工業地帯に行き先が集中していた。女子は短期出稼ぎ型の若年工場労働者が多く、その8割が紡績女工であった。」 P 25

合計特殊出生率 「戦前の1925年は最低の大阪について沖縄は第2位の3.85(全国5.08)」 P 28

2)でいわれる「長期に維持され」る前の、1880年と1920年の間に、人口が80%以上増えているようだが、そのあたりについても知りたいものだ。この時期に、学校教育が劇的に普及している、また、生産・消費のありようをふくめて人々の生活のありよう大きく変化している。そのことと人口問題の関連を知りたいものだ。

そして、移民・出稼ぎ、そして戦争と人口問題、そして教育とのかかわりについて深めていきたいものだ。

また、3)で示された合計特殊出生率の低さは、人々の産育観・子ども観とどのようにかかわるかも知りたいところだ。

戦後沖縄の人口 県外流出 U・Iターン 若林本2 (2009年10月15日)

4)「一九五五年十二月、琉球政府は「過剰人口」を問題視し、「人口問題研究会」を設置し、人工妊娠中絶の合法化を求め、優生保護法の立法化を画策する。また琉球列島米国民政府は「過剰労働力」を懸念し、海外移民に解決策をもとめた。」 P 6

5)50年代初めから本土日本経済の成長に伴い、労働力の流出が著しくなり、65~70年6万9105人が、69~71年に県外流出が急増した。」(ママ) P 10

6)「Uターン人口は、75年3876人、76年以降も2800人前後で、20~24歳の若者Uターンが一定して多いのも沖縄の特色である。」 P 11

7)「若年層の失業率が高い理由の一つがUターン者の多いことである。」 P 13

8)「U・Iターン率をみると、全国平均25.3%を大きく上回る41.6%というふるさと志向の強さが示された。」 P 14

9) 石垣島 2003年から「住民票異動(ママ)のある転入人口は3000人、異動しないで生活している人口は5000人に達する。ほとんどが本土からの移住者で石垣島の人口は2005年センサスで4万5145人。これまでの微増だったのが2003年を境に増加している。 P25

これらのことをどう評価するのか。

「過剰人口」「少子化」といったことへの政治的政策的対応はよく語られるが、人々の心情レベルでの受け止め、あるいは地域社会の受け止め方をどう評価するのか。

なにをもって、過剰といい、過小というのか。

同じように、U・Iターンの多さをどう評価するのか。あるいは、そういう問題への関心の持ち方をどう考えるのか。

9) のような住民票移動なしの生活者は、南城市あたりでは少ない。住民票は移動したが、ほとんど沖縄にいない人を何人か知っているが。

この問題の考え方は難しい。「沖縄のいいところ取り」だけにしてほしくはないが。

沖縄の合計特殊出生率の高さなど 若林本3 (2009年10月16日)

10) 合計特殊出生率 「戦後は一貫して全国第1位の高出生率を維持している。」 P28

「家族移動、ジェンダーの視点からみて地縁・血縁共同体社会の緩やかな柔軟な軸と、男系原理に基づくトートナー(位牌)継承に規定される硬直した軸の二つが沖縄の高出生率を支えているといえないだろうか。」 P29

11) 市町村別合計特殊出生率 1998~2002年

1位	多良間村	3.14
2位	下地町	2.45
3位	伊是名村	2.35
4位	伊平屋村	2.30
5位	城辺町	2.25
6位	平良市	2.21

南城市旧4町村は低い

40位	玉城村	1.78
47位	大里村	1.69
50位	知念村	1.57
52位	佐敷町	1.55

沖縄県最下位

よく話題になることだが、10)に書かれているような理由も聞く。ほかにはないだろうか。

それにしても、宮古など、離島地域の高さはなぜなのか、考えたいことだ。

そして、南城市を構成する旧4町村が、すごく低いのはなぜか、これはおおいに考えたい問題だ。今の私には仮説さえ思い浮かばない。話題にしたいことだ。あえていうと、20代~30代前半の人口が流出して少ないことか。それにしても、近隣の類似地域と比べてもなぜ低いのか、わからなすぎる。

12)「沖縄県の人口動態の特色の一つとして、一九九〇年代以降、近年の生涯未婚率が高いことが挙げられる。東京など大都市圏の高いことはよく知られているとしても、特に男子については一九二〇~六〇年値および二〇〇五年値(22.29%)では、東京をぬいて全国一の高さと化し急増が著しい。女子についても二〇〇五年値9.73%は、東京の12.56%について第二位と高率」P48

これまた、なぜなのか。考えたい。経験的に、生涯未婚率が高いことはわかる。まわりにも多いのだ。なお、このことが「まずい」ことかどうかは、別問題だ。

13)「「嫡出でない子」の出生数と割合は、1997年に3.6%で全国平均の1.4%より2.5倍である。」P49

こうした状態があることはわかるが、なぜだかわからない。ただし、この%で「高い」ことが、よくないこととはいきれない。北欧などは、この%よりはるかに高いとのことだ。

中年の死亡率 国際結婚など 若林本4 (2009年10月17日)

14)「40代後半の死亡率が女子は全国1位、男子は2位と高い」P38

この統計の年数が不明だが、2000年前後だろう。

15)自殺率 「男子についてみれば、全国で2000年に三位、なかでも40~54歳、60~64歳では全国一位と、中高年男子の自殺率は深刻である。」P43

この二つとも大変気になる。働き過ぎをふくむストレス過重が反映しているように私は思う。「沖縄はのんびりしている」「癒しの島だ」というステレオタイプ把握では、解けない問題だ。

16)「国際結婚の比率も全国水準の3.8%に対し、沖縄県は4.4%、全国では妻が外国人のケースが高いのに対し、沖縄県では夫が外国人であるケースが69.5%、夫の国籍の84.3%が米国にあり」P52

17) アメラジアン

日本人女性と米国男性	沖縄の数	
国際結婚	1992~1998	206~285組
離婚		41~80組
出生数	190~258人	P106
18歳以下のアメラジアン数	県3700人	野入推計3900人 p107

これらのデータは、10年以上前のものだ。行政によるきちんとした調査が行われていないらしい。アメラジアンに限らず、二つ以上の文化にかかわって出生してくる子どもたちに適切な、複数文化の教育、バイリンガルの教育を保障していくためには、正確な調査が求められる。

日本の貧困率 子どもの貧困 沖縄の場合 (2009年10月25日)

厚生労働省が、長年してこなかった貧困調査を、政権交代もあってのことか発表したことが、10月21日の新聞で報道された。

ちょうどこの折、私は、浅井春夫ほか編『子どもの貧困』（2008年明石書店——以下「浅井本」と述べていく）を読んでいた。この両者から私が考えたいことをいくつか述べたい。さらに両者とも触れているわけではない沖縄にかかわっても述べたい。

まず、両者とも、OECD（経済協力開発機構）の調査を参照している。国際比較もふくめて、多様な分野の政策立案上、国際的な「権威」を持ってきているからだろう。PISA学力調査もOECDのものだ。

この調査は、「全人口の可処分所得の中央値（07年は一人当たり年間228万円）の半分しか所得がない人の割合」（タイムス10月21日）である。それが、近年増加傾向にあり、2007年は15.7%である。そして、「子どもの貧困率」は、07年14.2%である。

浅井本では、数字に加えて、日本について、次のような傾向をOECD資料から読み取れる、と書いている。

全人口、子どもの双方とも、「増加傾向にあること」

「OECD加盟諸国の平均より高い水準にあること」

「アメリカやイギリスなど市場経済を重視する国々と北欧諸国のように社会保障による所得再分配機能を重視する国々では、前者が高い水準にあること」

「日本の税制と社会保障制度は、子どもの貧困率を減らす方向に作用していないこと」P37

さらに、浅井本は、「未婚の子を含むひとり親世帯の貧困率は38.3%であり、夫婦世帯の11.1%に比較して高い」（2003年データ）P37をも指摘している。

こうした指摘を沖縄にあてはめたらどうだろうか。公表された調査があるのかどうか、残念ながら私は知らない。とはいえ、県民所得が圧倒的に全国最下位である沖縄の貧困率は、かなり高いだろう。たとえば30%内外

の数値が推理できよう。

実際、私の周辺を見ても、貧困との境界線上を意味する一人当たり228万円の半分の[114万円]以下の人は、大変多い。子どもや高齢者もすべて含むので、世帯主が300~400万以下であれば、その可能性がある。

そして、学力調査の点数と所得額との関係が深いことは、いろいろな調査で示されているが、最近でも、全国学力テストにかかわって、そうした傾向を示す文部科学省の調査が報道され、このブログでも8月8日記事で触れた。

こうなると、「沖縄の学力が全国最下位なのは当たり前であり、所得上昇、貧困脱却の課題を避けては通れない」という主張がでてこようが、その論は意外に聞かない。私が知らないだけかもしれないが。

ところで、こうした貧困の定義は、金銭レベルで測る経済的なものだ。それ以外の視点もふくめて、この問題についての記事をさらに続けたい。

日本の貧困率 沖縄の場合 その2 生活費・教育費 (2009年10月26日)

OECDや日本政府もふくめて、たいていの貧困をめぐる調査は、金銭であらわせる経済面について行われている。しかし、人々の生活がどれだけ金銭に依存しているかの度合も勘案する必要がある。私たち夫婦が、3年前に「二人で一か月10万円で暮らせるまち・むら」というテレビ番組に出たとき、東京や名古屋あたりの方々から「うそだろう、テレビ局のやらせじゃないか」などといわれた。番組では、衣食や新聞代・ガソリン代などの日常の「基本的生活費」の総計で、その時85000円と算出したが、今でも変わりはない。このほかに、税金・保険・旅行代・住宅補修費・自動車購入費などがあり、それらを全部合わせると、年間200万円を超す、年によっては300万円を超すことがあるのが実際のところだ。

それにしても、東京や名古屋の方々から見ると驚きのようだ。それは、家庭菜園、近隣の方々との「物々交換」を含めた頂き物があるし、金銭を使う場が、都市と比べて格段に少ないこともある。たとえば飲み屋に入るのは、年に2~3回だ。近くにコンビニも銀行もない。価格の安さもある。昼食弁当が300~500円なのだ。だから、近隣の方々には「浅野さんたち、1か月に10万円も使っているの」といわれてしまった。

このように、都市と農村の金銭依存率や、物価の差異も考慮にいれなくてはならない。その点でいうと、沖縄、特に「田舎」は、所得の額面の低さほど「貧しくはない」

ところが、教育費だけはそうはいかない。給食費・教材費など学校から請求される額、塾費用などは、都市と農村の差は小さい。そして、子どもが専門学校や大学に通うとなると、都市と農村との変わりほとんどなくなる。だから、教育費負担は、農村では他の経費と比べるとかなり高くなる。農村だから安いということはないのだ。

沖縄の大学進学率が全国最低で、約30%ということには、こうした事情があるのだ。本土大学に進学させるというのは、沖縄のなかでは、かなり高収入にならざるをえないのだ。10年ほど前、子ども一人を大学進学させている保護者の年収は600万以上、二人以上の場合は、1000万円以上という調査があったが、それに該

当する沖縄の親はどれだけいるのだろうか。

このあたりは、教育費の公費負担割合の高低が問題にかかわってくる。アメリカなどと並んで大変低い日本では、保護者負担の比率が高くなるし、低所得者にはストレートに負担過重になる。所得と学力テストとの相関が高いということを考えるとき、こうした視点は欠かせない。

日本の貧困率 沖縄の場合 その3 多様な文化の豊かさ (2009年10月27日)

当然のことながら、貧困かどうかは、金銭、つまり経済からだけでは測れない。他に、文化、人間関係の二つについて、豊かさ・貧しさをみる必要があることは、いろいろなところで指摘されている。

フランスのブルデューが、経済資本と文化資本の二つの視点で、階層分析をおこなったことはよく知られており、私も20年ぐらい前に、いろいろと学んだ。

人間関係については、社会資本という言い方が使われるが、私は、「人間関係資本」という言い方をしている。そして、この三つは別々のものでありながら、しばしば関係し合う。浅井本のなかにも、次のような記述がある。

「家族の経済的な『ゆとりのなさ』は、子どもの活動と経験を制限する方向に作用し、同時に親の社会的孤立を招いていることになる。」P39。

こういう例には、とくに都市地区でしばしば出会う。親にしろ子どもにしろ孤立傾向があれば、文化も家族関係のなかに閉ざされがちになったり、テレビの過剰視聴になったりする。

福祉や教育への公的負担が低い国では、福祉や教育の費用を自前で負担することになる。そのため、経済状況がストレートに文化状況に反映してしまう。「教育は金次第」なのだ。この言葉を1990年代に文部官僚が述べて、物議をかもしたことがある。

そして、社会階層に、こうした問題があらわれやすい。この問題については、先に紹介したフランスのブルデューだけでなく、階級社会の強い伝統をもつイギリスでも研究されてきた。浅井本でも、イギリスのミドルクラスとワーキングクラス・貧困家族の子育ての類型の研究が紹介されている。P292

このように述べてきたが、文化や人間関係が、経済とは独自なものを持つことにも注意を払う必要がある。「経済的には貧しくても豊かな文化を持つ」「経済的に豊かでも文化的に貧困だ」という例はあちこちに見かける。前者については、福祉の公的負担比率が高い国ではたやすくいいうことだろう。後者については、1980年代以降、日本でよく指摘されたことだ。

その際に、地域の文化が多様性を促進して、国全体の文化をも豊かにする方向を強調するか、中央文化への集中を強調するか、ということにも注目したい。いいかたを変えると、多様性が文化を豊かにすると考えるかどうか、である。日本の教育は、その逆の典型であった。たとえば、ウチナーグチは抹消して標準語を注入してきた。ウチナーグチもヤマトグチも豊かにするという発想は弱かった。バイリンガルの発想がないのである。

その結果、地方の文化は低いものとみなされ、方言を使用するなど、地方の文化を持っていることは、文化的に劣るとされてきた。近代沖縄の教育は典型的にそうであった。

だが、中央統制が弱い分野では、地方の独自文化の発展のみならず、全国的に多様な文化形成に強い役割を果たした。音楽など、沖縄の芸能には、そうしたものが豊かに見られる。このあたりで、同じ文化でありながら、教育と芸能の著しい違いに注目したい。

子どもの貧困 沖縄の場合 その4 人間関係の豊かさ (2009年10月28日)

文化資本や人間関係資本にかかわって、浅井本は興味深い UNICEF の資料 (2007年) を紹介している。ウェルビーイングという言葉が最近よく使われる。言葉通りの意味だが、福祉と訳されることもある。そのウェルビーイングの中身として、この資料は、「物」「健康と安全」「教育」「家族・友人関係」「行動面とリスク」「主観」をあげて、「子どものウェルビーイング」を、21ヶ国を対象にして、その順位を表している。P284

おおよそでいうと、これまで述べてきた経済資本を「物」、文化資本を「教育」、人間関係資本を「家族・友人関係」が表しているといえそうだ。

総合1位のオランダの、この三つの各々の順位は、10, 6, 3だ。

2位のスウェーデンは、1, 5, 15だ。

3位のデンマーク、4位のフィンランドは、スウェーデンにとっても似ている。北欧諸国は、「物」「教育」で高く、「人間関係」では平均ぐらいだ。カナダも同じ傾向だ。

全体でもっとも厳しい評価を受けた最下位はイギリスで、18, 17, 21位だ。ついで厳しいのはアメリカで、17, 12, 20位だ。

オランダ、そして政策的に対照的な北欧と英米の二つのタイプとは異なる国を探すと、イタリアがある。14, 20, 1なのだ。イタリアのように人間関係が高い国には、ポルトガルの16, 21, 2、スイスの5, 14, 4、ベルギーの7, 1, 5がある。

興味深い調査だ。日本は、この調査には出てこないのだからわからないが、どこになるだろうか。そして、沖縄はどこに近いだろうか。沖縄は経済、教育では厳しいが、人間関係が豊かだとよくいわれるので、イタリア、ポルトガルに、もしかして、オランダ、スイスに似てくるのだろうか。

想像してみるだけで、興味もたれる。

沖縄は、人間関係が豊かだといわれるが、その中身はどんなものだろうか。また、地域、門中、家族、同級生、職場などつながりがよく残っているからだ、ともいわれる。でも「残っている」以上にそうしたものを作ることも積極的だからではないかとの意見もできそう。開業率廃業率全国第一位は、これらと関係があるのかなのか。いろいろと考えてみたい。

そして、豊かといわれる人間関係だが、孤立を深める人もいるし、むしろわずらわしさを感じて「逃げる」人もいる。こんな問題と、子どもの貧困、教育の問題とをからめて考えていきたいものだ。

日本の貧困率 子どもの貧困 その5 子どもの仕事 (2009年10月29日)

子どもの貧困問題は、児童労働の問題とかかわって論じられることが多かった。児童労働は、私の子ども時代である1950年代までは、別に珍しいことでもなかった。私も家業の婦人服仕立業、副業の農業の仕事をかなりした。学校から帰宅して、父親に出会うとすぐに仕事をいわたされるので、見つからないように帰宅する工夫をしたものだ。

その時代は、児童労働のために学校に通わないことが問題とされていた。家庭学習などをするかしないか、などではなかった。小学校時代の私も、家庭学習の記憶は薄い。宿題がでて、学校でやっていた。家に自分の机などない時代だ。

こうした事情は、今日でも発展途上国ではよく見られることだ。浅井本はインドの事例を紹介している。この本は、子どもの貧困にかかわる、様々な現場問題を内外を問わず、多様に紹介している点に一つの特徴がある。

さて、この本でも、子どもの労働問題に触れているが、単に学校に行かない行けないといった角度からだけでなく、子どもの労働の教育的意味について、ガンジーなどを出して論じている(P319)。こうした視点からの主張と実践は、教育思想史をみるといろいろと出会う。しかし、今日の先進国では、子どもの労働チャンスは大変少ない。

沖縄もふくめて日本でも、親の生産労働を見る機会が大変少ないだけでなく、家事にかかわっても、そして自分自身のことにかかわっても、働く時間が大変少ない。その意味では、子どもの自立がおしとどめられているといえるかもしれない。

何らかの形で、子どもが仕事・労働にかかわることは大切だと思う。それは大人になっていくうえで不可欠なことだと、私は考えている。子どもの仕事は勉強だといって、仕事を免除することは、子どもの成長を押しとどめることになりさえする。

ただし、なんでもさせればよいというものでもない。仕事・労働をさせる場合、次のことを大切にしたい。

大人が仕事の手回しをして、仕事を細かく分けて、その一部を大人の指示通りにやらせるというのは大変まずいということだ。つまり「手伝い」ではダメなのだ。それは、仕事について子どもが学ぶ機会を大幅に狭めてしまう。仕事をあるひとまとまりにして与え、子ども自身が自分で工夫し、必要なことは大人に教えてもらいながらも、最終的には子ども自身でやるのが大切だ。最初は失敗するかもしれない。その失敗は、次は自分でカバーしていくことが大切だ。

そうした仕事は、子どもの総合的な成長にプラスになる。そうした仕事を家庭内だけでなく、地域とかかわって展開すれば、将来、地域づくり、仕事づくりにからんでくるかもしれない。

暮らし つながり 千葉大学学生の礼状に見る沖縄印象3 (2009年12月27日)

※ シリーズ1掲載の記事の続編である。

「建物(家)が近代的なことに驚きました。私自身のイメージでは、屋根瓦でブロック塀に囲まれた家ばかり

と思っていたのですが、大きな間違いでした。」

「お宅に招待されてとてもうれしく思いました。日本文化と家族の様子に興味を持っているからです。家具、飾ってある作品、庭の植物・野菜。語らいなど。海をみながら、ふるさとの母を思い出しました。『天国のような沖縄』と『悲しい歴史を持つ沖縄』、その中で、人間について考えました。」

「先生が自宅でおっしゃっていた『都会からきた人は、沖縄にきてコンビニがないという。それじゃ意味がない』という言葉が印象的でした。私自身がそういうタイプの人間だったので深く反省しました。レストランの人たちはみなさんいい顔して働いていました。賃金が低いけれども、それ以上に人と人とのかかわりを大事にして、とても人間らしい生き方をしていると感じました。」

「自分では気づかないほど『お金』が当たり前のものになっていました。お金がないと何もできない。就活も、生きていくための仕事、つまりお金を稼ぐことが大前提にありました。これから社会がどうなっていくかわかりません。もっと先のことを考えつつ、プラスしてお金をつかわずに生きていく、人と人とのつながりあい、などをこれからは意識していきたいと思いました。」

「沖縄との時給の差に驚きました。生活は厳しくないのかな…と、思いましたが、こちらにはないような周囲とのつながりや協力体制があり、暮らしが成り立っていることを知りました」

「全国学力テストで最下位をとるのが沖縄か青森かだと聞き、これは教育の難しさだと感じました。基準が東京なので、子ども達の理解が進まないのも当然だと思います。だからといって沖縄基準にすればよいというわけでもありません。この難しさを現職の、とくに小学校の教師に話を伺ってみたいと思いました。」

まぼろしの泡波をいただく（2010年1月12日）

希少なため、ふつうの泡盛の20～30倍の価格。

波照間に行ってきた卒業生からプレゼントされた。

彼は、沖縄の離島をめぐり、とくに漁業への関心がすごい。

修士論文は佐良浜の漁法なのだ。



22. 集落

※集落での「社会教育」を含む

集落の暮らしと組織の変化（2006年3月17日）

私が1972年から1990年まで暮らしていたのは、那覇の市街地2年間・南風原の小さな集落2年間、西原の新興団地14年間で、南風原以外は沖縄の伝統的なムラではなかった。南風原の時は結構近隣とおつきあいしていたが、伝統的なムラ組織のなかでのおつきあいはそれほどしていなかった。借家であったし、ヨソからきた一時的な居住者としての存在であった。

それに比べると、2004年秋からの玉城での暮らしは、まったくの旧来のムラ組織のなかでの生活である。かつ一応は正式メンバーの一員である。「一応は」と書いたのは、集会・共同作業・行事などのムラでの諸活動を「一応はこなしてはいる」が、ずっと住んでいる人からみると、まだ「新参者」の感じがもたれているだろうし、農業を軸にした伝統的な暮らしとはかなり異なる雰囲気をもっているからである。なにしろ「本土」からきたヤマトウンチュであるし。まあ、それでも結構、近隣の方々とおつきあいしているとは思う。

こんなことを改めて考えるきっかけは、京都府立大学の調査旅行におつきあいしたことにある。旧知の人がメンバーであったし、10年ほど前、大学の授業づくりの講演・ワークショップを同大学で行なったというつながりがあり、全国各地の集落の動向の調査の一環として沖縄にこられた調査団とおつきあいしたのである。

沖縄初来訪の方々の沖縄についての質問を聞いていると、30年あまり前の私自身を思い起こしてしまった。言葉からはじめて多くのことが、初めての出会いなので、かなり素朴な質問が登場してくるのである。そんなことは予想されたので、学術的調査以前に、まずは沖縄の田舎の雰囲気に触れていただくことをおすすめした。ちょうど到着の時間が、大潮の干潮の時刻であったので、まずは海岸にでていただいた。そして我が家近辺を散策していただいた。それにあわせてホテルではなく、知り合いの近隣の民宿に泊まってくださった。

糸満などこの地域外を主とした調査であったが、この地域も全国的にみると集落の伝統的姿がとても残っている地域という見当のようである。調査団とそれにこたえる人の話におつきあいしていて、改めてこのあたりの集落の歴史・今日的な位置などを考えさせられた。

この周辺は100年以上（数百年以上とっていいのもありそう）の伝統的行事が今も継承されている。無論、かなり変容していたり、なかにはその意味が余り了解されないまま行なわれているのもあろう。それらの多くは、農業共同体の生活を背景にしている。戦前までは、あるいは戦後の一時期までは、それらの行事の意味は実感的なものがあつたろう。しかし、ここ数十年の間に、離農、農業の副業化、本土・沖縄内都市地域への移住・通勤、あるいは地域の土木建築作業などへの従事ということで、生産・生活との関係という点でみると、様々な行事が人々の感覚からの疎遠化が進行してきた。

ところで、「復帰」後の公共工事は、土木建築作業に従事する人を増やしたが、近年では公共工事も激減し、また「三位一体」策のもとで、自治体財政が従来のような形ではなくなりつつある。そうしたことが、人々の職業についてだけでなく、集落のありようにも深い影響を及ぼしはじめつつある。たとえば、玉城村は合併して南城市となったが、それがどう影響してくるのだろうか。他地域では行政事務単位としての集落を統

合する動きもあるようだ。そうすると、数百年にわたって続いてきた集落の行事などはどのようになっていくのであろうか。

基地とのかかわりで、公共工事を追求する動きが今なお活発な北部地域とは異なって、ここ南部地域では公共工事に依存することはできなくなりつつある。また、沖縄では高い比率を占める観光産業も、南城市ではまだそれほどの比率を占めているわけではない。

私個人にひきつけて別のことでいうと、字対抗・村対抗としてこれまで行なわれてきた卓球の試合がどうなるのか、といったこともある。ここ数十年間スポーツが集落にかかわる行事としては重要な位置を占めてきた。各集落の公民館に掲げられている賞状額の圧倒的多数がスポーツ関係であることがそれを示している。スポーツの担い手である若年層の激減、そして合併などの地方行政「改革」がどう影響していくのであろうか。それも集落のありように大きな影響を及ぼす問題である。卓球については、今年は合併前の村単位で行なうとのことであるが。

こんなことを考えると、今改めて集落は激動状況に入りつつあるということが実感できるようになってきている。そんななかで、私たちを含めて「ヨソ」からきた「移住者」はどんな位置になっていくのだろうか。最近の沖縄は移住ブームで、移住者が激増しており、それが沖縄人口における社会増をひきおこしている。その方々が、長年集落に住んでいた方々とどのような「コラボレーション」をするのであろうか。そのことは集落の新たなページをつくりだす可能性を秘めていると同時に、そうならずにたんなる「棲み分け」になったり、都市型によくあるバラバラな関係を促進したりするのだろうか。

そこでは、もともと集落に住んでいた人たちにせよ、移住者にせよ、新たな「人生創造」のテーマが浮上してきている。象徴的にいうと、子どもを本土の大学に進学させようとする、その財政経費を補うためには、本土ないしは都市地域に出て働くか、土地を売るかといったことに直面する人があらわれる。また、移住者にしても、裕福なリタイア層なのか、そうではなくロハス的な生きかたを求める人なのか、それで大きな違いがある。そして、多くの場合、従来のような年収数百万円以上ということを前提に生活設計するのは異なる生きかたをつくりだすことが求められる人が多い。そしてそれはライフスタイルの変更・創造の問題ともなる。つまり、社会的変化が、人々の人生創造の問題と結合して登場してきているのが今日の特徴である。そのことを不問に付して考える思考が根強いなかで、この問題を改めて強調したい。

こんなことを考えて、地域の起業家的な活動をしておられる方に意見を求められた際に、人生創造産業・人生創造ビジネスといった感じのことを発言したことを、その方が関心をもたれて、重要な会議で発言したとのことである。改めてじっくりと構想していきたいことである。そんなこともかかわって私が主催する「人生ユンタク」の集まりに期待している。

近く開かれる「島や宝」のコンサート・ユンタク会議は、環境問題がテーマだが、その背景には以上述べてきた問題が深く結びついていると思う。

沖縄の、集落の、人々の、こんな過去—現在—未来の問題にかかわって、京都府立大学の調査研究団はどのような提言をするのだろうか。注目したい。多くの調査研究が、調査対象から「情報のみを収奪」することに終わる結果になっているのではないかと、いうよく指摘される形にならないことを祈りつつ、研究成果と提言に期待したい。

沖縄のムラの共同性 琉球大学本コメント (2008年9月3日)

※ 琉球大学編『やわらかい南の学と思想』(沖縄タイムス社2008年)

沖縄のムラの共同性の強さについては、いろいろなところでいわれる。ユイマール精神などは、肯定的なとらえ方だが、それはムラの共同作業から発する。逆にムラの縛り・わずらわしさを嫌って、ムラから「出る」人もいる。逆にその良さで、ムラにもどる人もいる。

そのムラにかかわって、である。

1) 村の農地は、近世期に地割制が採用されることが多かった。農地を定期的に交換していくシステムである。このシステムは、「農家の財産(家産)が形成されないため、農家と農家の関係が縦の序列でなく、横のつながりで形成されます。」(P59 仲地宗俊)

2) どの集落でもみんなで分け合って食べるという共食の文化が根付き、冠婚葬祭や村の行事を通して肉、魚、豆腐などの蛋白質を摂取する機会に恵まれたのが村民の健康には大変幸いしたと思います。」(P211 平良一彦)

こうした色合いはいまでもかなり残っているが、とくに農村ではそうである。私が住んでいる集落でも、それを実感することがしばしばある。

私が生育した岐阜県の農村でも、こうした要素が残ってはいるが、高度成長期以降、蔭がうすくなっている。沖縄では、それよりはるかに「横」の関係が強いし、共同性がいまなお強いと感じる。

問題は、こうした共同性、「横」型が、今後どのように『再創造』されていくかであろう。従来のものを引き継ぎつつも、従来のものの問題性をどのように解決しつつ、新たなものをいかに創造していくか、ということである。そのことは、農村だけでなく、その再創造において難しさを感じられる都市においても、追求してみたいことである。

『集落が消えていく』報道 なぜ沖縄は少ないのか (2008年11月7日)

琉球新報は毎週水曜日夕刊に「世界と日本 大図解シリーズ」というのを見開きのとてもでかい紙面を使って報道している。どこか本土の通信社と契約しての記事だが、大変わかりやすく、学ぶことが多い。

今回の11月5日の記事のタイトルは『集落が消えていく』だ。そこで、気づいたことの第一は、沖縄ではとても少ないことだ。

日本全体と比べてみよう。沖縄は日本人口の100分の1なので、簡便な計算で、統計数字をみるときに、1%を目安にして、私はまずは考えてみる。

では、日本全体と沖縄の数を比較してみよう。左が日本全体、右が沖縄だ。

過疎地域の全集落数	62273	289
その集落の平均世帯数	69	170

人口	183	419
消滅する可能性のある集落数	2643	2
そのうち10年以内の可能性	423	0
1999～2006年に消滅した集落数	191	0

沖縄の数が少ないのがきわだっている。なぜだろうか。考えられる理由として、まず沖縄は「遅い」だけで、いずれ全国状況とかわらなくなるはずだ、というもの。もう一つは、沖縄には食い止める何かの要因がある、というものだ。希望としては、後者を信じたいが、私にはよくわからない。専門家に聞きたいところである。新聞報道だから、この記事についての専門家にインタビューをしてほしい、と思う。

ついでにだが、我が家中山集落は、このなかの「過疎地域の全集落数」に入っているかどうかはわからない。でも、どんどん減ってきて、最近ではようやく落ち着いているようだが、世帯数70あまり、人口200人あまりという小規模には変わらない。

この記事には、そうした集落での「今後の地域運営」「取り組むべき課題」を箇条書きであげている。「取り組むべき課題」としてあげられているなかで、いくつかを紹介しよう。

- ◆ 人材の発掘・育成
- ◆ 地域資源の発掘・有効活用・・・コミュニティビジネスの展開も
- ◆ 都市との交流・連携の促進・・・二地域居住、UJIターン、空き家の有効活用、子どもの農山漁村交流など
- ◆ 生活サービスの供給

地域起こしに関心がある私なので、こんな記事にすぐに目が行く。

安里英子『沖縄・共同体の夢——自治のルーツを訪ねて』を読む

(2008年11月17日)

榕樹書林2002年刊。この本も県産本フェアで見つけた。シマ(村落共同体)に着目し、それを現代的に発展させようという志向を感じたからだ。

シマについては、その絶対的賛歌と、対照的な縛り・閉鎖性・旧慣墨守性への否定的まなざしとがある。私自身は、まさにそのシマに住んでいる。シマの変容が著しい近年の沖縄本島では、シマ的特徴がまだまだ強く残っている我がシマである。ここでも、シマの協力共同性親密性を讃える言葉があり、シマにUターンしてくる中年世代がいる一方で、仕事などの都合、あるいはシマの共同生活のわずらわしさなどで、シマから出ていく人々もいる。

著者は、「これまで多くの人たちが論じた共同体論の誤りは、共同体を固定した社会としてとらえ、時間が停止してしまっていることである。」と書いている。その通りである。シマは昔からずっと同じ形で続いているわけではない。シマの暮らしを支える生産生活のありよう、また時の政治によって作り替えられてきた。著者は、

「自治のルーツ」としてのシマに注目するが、それはシマを固定的にとらえるのではなくて、「シマの発展」という視点からとらえている。私はこのとらえ方に共感するし、私自身もそのことを大切にしたいと思っている。

この本は、こうした視点から、久高、奥共同店、浦添の仲間、宮古の池間などを例にとり、多様な角度からアプローチしている。とくに、近年の基地・「開発」・環境などをめぐってのシマのからみについて書いている。

それらはシマ全体が共同団結して、積極的な動きを創り出した例を中心に述べられている。なかには、シマが賛否で両分され、難しい局面にたたさされていることに言及する場合もあるが。

ところで、都市地域、都市近郊地域では、シマ的ありようは、事実上変容崩壊している。そうした事態のなかで、著者がいうように、シマを「発展」させていく展開をいかに現実化するのか、が問われる。ないしは、ある面で、シマ的なものを受け継ぎつつ、それに代わるものをいかに創出していくのか、が問われる。現実には、そうしたものが成功せず、シマ的なものが崩壊することで、人々のつながりが希薄になり、商品・金銭を通してのつながりの要素が強くなる状況が広く見られる。かりにシマ的なつながりがあったとしても、それが、人々にとって否定的なものと感じられて、それから抜け出すことの方に関心がいく状況さえある。

このような意味では、シマの「発展」を今日の状況のなかでいかに追求していくのか、そのことが大きな課題として存在している。その点は、私自身の大きな課題でもあり、そのことについて、ここ20年来、いろいろな形で書いてきた。簡潔にいうと、シマ的なものと、アソシエーション（結社）的なものとのかわりについてである。そのことを沖縄に即して、沖縄のシマに即して考えたいのが、今の私である。

ところで、もう一つ、「沖縄には大きくわけて伝統的な二つの自然観がある。一つは沖縄独自の信仰と深く結びついた自然観である。二つ目は、一六世紀から一七世紀にかけて中国から伝えられた風水思想」と、述べている点にも注目したい。

加えていうなら、一つ目の伝統的な自然観にしても、稲作が普及する前と後とでは大きく変化しただろうことは、容易に想像できるが、そうした点にも着目して深めていきたい。しかし、そのことを明らかにするのは難しいだろう。

また、内外の交流、移住などの関係で、多様な変化創造があったことにも留意しておきたい。二つ目はそれにかかわる。そして、それにも含まれるが、自然改造型自然観がここ20～40年かなり支配的になったことにも留意しておきたい。

山城千秋『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』を読む1（2008年12月11日）

本屋の店頭で見つけた本だ。研究領域が近いにもかかわらず、それに山城さんのこの博士論文を指導し、かかわった研究者たちは、私の知人たちでもあるのだが、この本、というよりもこの研究の存在すら知らなかった。加えて拙著『沖縄県の教育史』も参考文献として掲載されている。

2007年エイデル研究所出版の本だ。本土出版社で専門研究書であるためか、目に触れにくいものだったためだろう。しかし、この本は、沖縄の「シマ」、つまり字（集落・部落）や青年会に関心をもつ人、あるいは沖縄の地域起こしに関心をもつ人なら、是非とも読んでほしいと思う本だ。私自身も、これらの問題に関心もち

つつも、本腰を入れた研究を行わず、直観的な考えの段階に留まっていたので、大いに学ばされた本だ。

この本の豊かさは、なによりも著者自身が沖縄の青年会活動をしてきた人であり、それにもとづいて、沖縄の青年会・「シマ」についての強烈な思い、願いをもつことから生まれてきたものだろう。

著書の中心は、「地域青年会の民俗芸能活動に焦点を当て、青年がどのように文化創造の、ひいては地域自治の主体的な行為者へなっているのか、その活動実態を検討する」ことにある。そして「青年会の活動と学習が集落の自治と一体化した実践」ということに注目している。

そうした発想の背後には、「青年が経済的理由で一時期移動することはあっても、物質的豊かさよりも家族や親族、地域生活における文化的豊かさを選択する青年の方が、復帰後の『本土並み』政策に反して増加している」事態への注目がある。そして、「基地返還や沖縄の歴史・文化をふまえた内発的で維持可能な地域をつくるためには、青年の地域自治への参加が不可欠である」というモチーフがある。

そしてそれらは、従来の青年団研究が「自らの生活要求の妨げとなる地域の封建制を克服することが過度に価値化されたため、地域の自治・文化に対する青年の役割や教育的機能についての洞察は、欠落ないしは、軽視される傾向にあった」ことへの批判的な眼差しがある。

そうしたことは、本書全体を通して、青年会のみならず、「シマ」に対する「克服すべき古いもの」という視点ではなく、継承発展させるべき自治的組織という把握と結びついている。

こうしたことは、教育学研究にとってきわめて新鮮な提案であると同時に、現在「シマ」に暮らし、「シマ」の地域起こしに関心をもつ私にとっては、大変興味深い指摘である。

「シマ」・「青年会」・沖縄研究・文化伝承への視点 山城本2

(2008年12月12日)

この本の研究の注目点の一つは、「シマ」「青年会」などを、たんに「古い」とみたり、「鑑賞」的まなざしでもって見るのではなく、現実を直視しつつ、そのなかの肯定的性格を見出し、今後の実践展開につなげようとする姿勢にある。

たとえば、以下のようにである。

1) 本書の主題ではないが、シマ単位の『字誌』編纂が近年多くなっているが、それにも言及している。字誌の特徴として、「①住民の素人集団が主体、②字の公的事業、③1970年代からの新しい地域文化活動、④沖縄各地に広がる、⑤多くの住民の手弁当による参加、⑥成果としての本、⑦市民学習・生涯学習・地域づくりへの課題と展開」と絶賛している。私としてはそこまで絶賛していいのかどうか、いささか迷うほどである。

内容上の課題と編集以後の展開などについて分け入ってさらなる検討指摘が必要だろうと思う。

2) 沖縄研究を行う人のなかには、「沖縄の日常生活、地域課題を目にしながらも、文化の古層にしか関心を

示さないというとき、沖縄は単なる研究材料にすぎない」というケースがあるとの指摘。私自身は、こうした研究は「趣味」「鑑賞」的なものだとくりかえし発言してきた。その研究が沖縄の現在と将来にとってどのような意義をもつのか、という点に研究が自覚的であるべきだ。そして、たとえば芸能とか民俗について、それを超歴史的なものとしてではなく、歴史的にどう位置づけ、今日的にどのような問題を提起しているか、という視点をできる限りふくみこませて拙著『沖縄県の教育史』（1991年思文閣）を書いてきた。

沖縄研究ということでいうと、「復帰」後、沖縄調査研究が科学研究費などの予算措置をともなって、大量に行われるようになった。私のところにも、その調査研究のために協力を求める話がしばしばくる。多いのは、3月だという点は「皮肉」以上の問題だ。つまり、「予算消化」的側面と、どうせ研究調査するなら、あわせて沖縄旅行をしたいという事例さえかなりなのである。そうした研究に対して、「情報搾取」に近いのではないか、その研究は当の沖縄住民に対して、どのようなものを提供するのか、ということを厳しく問うことを私は重ねてきた。

3) 一回目にも少し触れたことだが、戦後の青年会や青年団についての研究の多くが、「ムラの古さ、ムラの貧しさからの解放」という視点から問うなかで、祭り行事に取り組む青年団に対して「行事青年団」という批判的なまなざし・評価をおくってきたが、それへの問い直しを行っている。この視点は新鮮だ。

その意味では、エイサーなどの芸能の伝承に取り組む沖縄の青年会に対する新たな積極的意味づけを行っている点が、この著書の重要な功績だろう。

4) この本では、文化伝承を「エイサー」に焦点をあてて論じているが、そのことにかかわって、このように指摘する。

「『エイサーはどんな衣装を着て、どんな太鼓でどのように踊るのか』ではなく、エイサーを踊ることによって何を感じ、学習し、何を次代に伝えようとするのか、という文化伝承における人間の介在を明らかにすることに、教育学の役割がある」と述べる。

こうした論を展開する際に、1980年代の北田耕也の論、つまり「物質的豊かさ、『大衆文化』に対抗し、『民衆の労働と生活の中から生み出された行動様式と価値表現の総体』である『民衆文化』論」を参照する。私の研究史にとっても懐かしい名前だ。80年代から90年代初頭にかけての、私の文化活動研究にあって、刺激を与えた一つの論だ。

私の場合、こうしたことを参照しつつ、その文化の表現内容、表現形式に強い関心をもった。その意味では、「『エイサーはどんな衣装を着て、どんな太鼓でどのように踊るのか』の類にも強い興味をもった。表現形式には、実は表現内容、表現思想が強く反映しているからだ。だから、拙著『沖縄県の教育史』のなかでも、そうしたことに触れて論を展開したし、1970年代末から80年代にかけての、琉球大学での学生指導や学校教員対象の文化創造ワークショップなどのなかで、こうした問題をかなり実践的に提案してきた。

だから、エイサーの隊列のありように強く関心をもってきたし、「古典琉球音楽・舞踊」のなかのジャンル特性にも関心をもってきた。このあたりについて、著書の今後の研究展開を期待したい。

シマ社会と青年会 山城本3 (2008年12月14日)

沖縄の青年会の特質は、シマ社会と結びついている点にある。そのことについて、著者は

「総じて青年会は、シマ社会と一体であることに存在理由を求めることによって、シマにおける文化の担い手としての役割を取得し、地域の共同性に収斂していく道筋をもっていると言えよう」と述べる。

その通りである。そして、そのシマ社会と結びついた青年会は、「外圧」のなかをくぐってきたが、今後も「外圧」があらわれてくるだろう。

その一つは、戦前における政府の「青年団」政策にある。しかし、これは実質的にくぐりぬけてきた。

大きいのは、近年の都市化のなか、そして青年も含めて人口移動のなかでの「外圧」である。また、行政施策、たとえば市町村合併のなかでの問題である。シマ青年会が弱体化しているなかで、市町村青年団が、「宇青年会活動を下支え的役割を担っている」例を、大宜味などを例にあげて述べている。ここで、シマ青年会を消滅させて、市町村青年団の方向へとすすむというのではなく、逆にシマ青年会を育てる方向を重視している点が注目される。現在の南城市青年会もそうした傾向を私は感じている。

この点にかかわって注目されるのは、「単一目的化した集団が数多く結成される今日の社会において、郷友会が母村に対する包括的・補完的役割と教育的機能を有し続けるためには、このような新しい集団との比較も検討しなければならない。」と述べている個所である。

今日は、地縁・血縁・「組織縁」、いずれにしても、「包括的」機能をもつ組織（その多くはもともとのシマ組織のように全員加入制をとることが多い）と、もう一つ、ここでいう「単一目的化」した組織の双方にかかわる時代である。そして、比重が前者から後者へ移りつつある。にもかかわらず、前者が不要というわけではない。このあたりのことは、拙著『<生き方>を創る教育』（2004年大月書店）を参照してほしい。

そして重要なことは、この両者とも、積極的に設立維持をしていかなければ、消滅の危険性があり、人々を孤立化させてしまうということである。前者についていえば、かつてのように、シマ社会が長期に「自然のごとく」存在するような時代ではないということである。その意味で、こうした集団を、時代特性によって模様替えしつつも、どのように持続させていくのか、が重要な課題となる。

そうした問題意識からみる時、著者が、青年会に着目したこと、というか、存在している青年会を、このように意味づけたことの意味は大きい。

山城本4 伝統芸能の継承と文化創造 共同性の視点から (2008年12月17日)

著者は、文化の視点から多くのことを検討している。

たとえば、「アメリカ世」の時代に、青年会が行ったエイサーなどの取り組みについて、「民俗芸能を単なる遊戯としてではなく、民俗芸能を通して支配に抗するために意志を結束し、民俗芸能の展開される場が学習の場の役割を果たし、自己変革を図るはたらきをもったと考えられる」と評価する。

こうした評価の一つの根拠として、「郷土の文化財に対する沖縄人の誇りは、演劇・音楽・舞踊など、文化的価値に根ざしており、それが特別な人々の独占の特権ではなく、誰もが自ら立って踊り、三線を弾くなど、民俗芸能と生活が一体化した形で文化が存在している」ということを述べている。

また、「芸能の演者と観客が必ずしも明確に分けられないことが、祭りの共同性を端的に表しているが、一方でひとたび芸能の伝承が途絶えると消えてなくなる危うさをもっていることである。」「集落に暮らすごく普通の住民が演者になり観客となるが、そこには境界がなく『見る人は演ずる人』にもなる。」などと指摘する。

そして、それらを「シマ」社会の共同性と結びついて考察している。これらの評価に私も強く同意できる。と同時に、それらに付け加えて、私はこう考える。

これらの指摘は、表現内容、表現形式、とくに表現形態にもあらわれていることに注目すべきだろう。たとえば、舞台と観客を二分するような場設定をとっていないことは重大である。円形を多用したり、演者と観客が入れ乱れる場設定、そのなかでの頻繁な入れ代わりが行われる点などである。しかし、こうしたことへの留意が近年少なくなっており、「民俗芸能」の「見せ物」化の進行への警戒が弱い点を、私は憂慮している。（参照 浅野誠『学校を変える 学級を変える』 なお浅野誠『沖縄県の教育史』もそうしたことに少しだが触れている）

また、次の指摘に注目するとともに、少々コメントしたい。

「一方で失った民俗芸能を復活させることは、住民の歴史認識学習と共同性による文化創造がなければ困難である。しかし、民俗芸能の復活は、地域文化の抜け落ちた部分を埋め直す共同作業であり、文化の原点に回帰するものである。」

ここで、「原点」とは何をさすのか、ということがある。たとえば、村芝居や民俗芸能の多くは、近世末期から明治期にかけて、つくられたということがある。ここで例にあげられている楚辺の組踊にしても、少なくとも近世末期以降、おそらく明治期のことだろう。特定の「原点」を設定することは、私は好まない。それは「特定のもの」を標準化し、それにいかに近いか遠いかで判断することを導きかねないからである。

私は、各時代おのおのにおいて、それまでの歴史的蓄積を継承しつつ、その時代なりの「共同性による文化創造」が行われていると考える。それは、「歴史認識学習」についてもいえることである。各々の時代において、歴史の発見・再編成・再創造が行われているし、行うべきだと考える。

その点では、首里城復元のような形の歴史の再編成・再発見と、「シマ」の歴史の再編成・再発見との両者の関係をどう把握するのか、といった問題にも視野を向けなければならないと思う。その点で本書の「字誌」への着目は注目に値するとともに、その時代特性と課題を明らかにするという形での深めが今後期待されるだろう。

文化の視点から、伝統芸能と、今日の大衆文化動向とのからみにも、本書は注目している。

「祭り行事の本質が形骸化し、一方でイベント化、大規模化していく今日において、青年会の文化活動は、地域の共同性と密接であるが故に、個々人の主体性に働きかけることができると言えるだろう」と述べる。

「文明による文化の模倣と大衆化の威力は、エイサーを青年会の特権から様々な場所で年中通して見られる民俗芸能へと普及させた。その結果、人々に忘れていた文化的価値を与えた功績の反面、『その意義を失いつつある芸能』へと消費・消耗させている。」

このような「文化の模倣と大衆化の威力」への厳しい批判的な視点が重要であるとともに、現代の若者がこう

した表現形式を活用しつつ、自らを表現していることをも直視する必要がある。そして、沖縄の伝統芸能とそれらを交差させて新たな表現をつくりだしている点にも注目する必要がある。「しまうた」ブームや、沖縄出身者の音楽などでの表現にもそれらが反映していると思われる。とすれば、そうしたことへの批判的なまなざしをもって、今日の時代における新たな創造が、伝統を継承しつつ、どう展開しているのかへも注目し、提案していく必要があると、私は考える。

その際、次のような指摘を視野に入れて置くことは重要であろう。

「よく沖縄には『古い伝統が残っている』と言われるが、それは『残っている』のではなく、危機的状況に瀕しているからこそ、地域の共同性を確認するために『残す』ことを主体的に選択したというのが真相である」

「青年の価値観が多様化すると青年会は当然衰退するはずが、民俗芸能への価値認識の高まりが逆に青年会を復活させていく。いずれにも共通することは、共同性の創造と発展が継続的に行われているということである。」

山城本5 浦添市内間青年会の事例検討（2008年12月18日）

「伝統の創造による共同性の再構築」というタイトルの第4章は、浦添市内間の事例検討だ。内間は、那覇に隣接し、人口が激増したところで、元々の内間住民よりも、移入した住民がはるかに多い地域である。そして、地域の伝統行事が大変希薄になっている地域である。その地域での青年会復活とエイサー創造の物語を、何人かのライフヒストリー聞き取りも含めて、興味深く描かれている。

その鍵は、青年会消滅とともに、過去の記憶さえ喪失したエイサーを、他地域から学びながらも、自ら創造復活させていったストーリーとそのなかでの「共同性」の復活の物語である。「青年たちは伝統の復活を諦めざるを得なかったが、『なければ創ればいい』と、伝統を新しくつくることをめざした」「エイサーも牧港の模倣から内間に『望ましい』エイサーへと約2年がかりで創作し、それが今日では内間の伝統として定着してきた」と描かれている。

これを著者は「共同性」の復活と表現している。私なりに付け加えると、消滅の方向にあったコミュニティ（地域）を、アソシエーション（結社）的色彩をとめないながらも、そこに地域的共同性を帯びさせることによって、創造していったともいえよう。

それは、かつての共同体（コミュニティ）が、青年会の組織形態も含めて、全員加入制を前提としていたが、そうした時代性地域性が希薄になった今日、自由参加の形式をとりながらも、そこに地域的性格を賦与することによって、コミュニティ的性格を獲得していったといえよう。

近年、エイサーがいろいろな場で盛んに行われている。たとえば学校の運動会がそうである。そうしたものが、いかに地域性・コミュニティ性と「伝統性」を獲得し、著者がいう「伝統の創造による共同性の再構築」へと向かうのかが問われる。

その点にかかわって、「大半の子どもエイサーは創作によるものである。そのようななかで、浦添市内間子ども会は、青年会との共同関係において、同じエイサーを学習する数少ない子ども会の一つである。」

ここで焦点的にいわれているのは、地域的共同性のことで、「創作」といわれているのは、その地域での創造

ではなくて、他団体が創作したものをを行うという意味である。

こうした問題を全国的視野でいうと、近年盛んに行われる「よきこいソーラン」のようなものを、どう評価し、今後の展開の課題として何を提起するか、ということにもつながる。

そして、こうしたプロセスが、「不良行為をする青少年たちが、青年会の勧誘や夜間パトロールによって青年会に参加し、エイサーを通して立ち直った青年は、数多い」と指摘するなど、共同性がもつ教育的意義・役割を強調しているのも、この著書の一つの特徴である。

また、こうした地域性を高く評価するからこそ、伝統の復活作業が、「方言学習」を必要として、そのために「方言学習会」を開いていることに注目している。この指摘は重要である。そして、こうしたことをさらにどのように展開していくべきなのか、についての提案へとつながっていくことになる。

もう一つ、私の関心としては、「伝統を新しくつくる」ことになった、このエイサーの表現内容・形式がどのようなものであったのか、それについても知りたいと思う。その内容・形式に、内間の「伝統的」地域特性、そして若者たちの現代的特性がどのように組み込まれているのかに関心をもつからである。

こうしたことを含めて、著者の今後の展開に期待するものである。

山城本6 技能 個人 地域社会 伝承 (2008年12月18日)

次の第5章は、離島の青年会について、とくに八重山を例にとって述べている。それらでは、比較的、共同体の姿が残っている例が多い。そして、それらでは、民俗芸能の伝承を軸に青年会が存在する。

「最初は周辺的な民俗芸能の『わざ』の獲得をめざすが、次第にその背後に多くの人々の社会的・文化的な、また歴史的な営みがあることを認識し、そこに参加している自らを発見する。すなわち、青年の主体性の確立とは、地域社会の成員になること、一人前になることを意味し、その評価と認知は、先行世代の地域住民にある。」と述べる。

だから、青年自身の青年会への参加理由にしても、一般成人の青年会への期待としても、「伝統芸能の継承」ということがアンケート調査などによって示され、また、伝統芸能の継承が、「通過儀礼」的な意味をもっているとされる。このあたりは納得のいく説明である。

そして、「『わざ』を習得するとは、『形』の模倣から自らの主体的な動き、つまり自らの『型』をつくっていくことであり」「『芸能を創造する』ことが伝承文化においては重要な要素となっている。」と述べられる。

このあたりに私は興味をもつ。というのは、この「創造」とは具体的にどのようなものとしてあらわれているのか。それは伝統そのままの継承であったとしても、その世代においては再創造となるということを指すのか、それとも言葉通り、伝承されたものそのままではなくて、オリジナルなものが、その世代において創造されるのか、そのあたりの意味について知りたいと思う。

山城本7 沖縄文化の創造 研究のさらなる発展への期待 (2008年12月19日)

著者は、終章で、「青年が民俗芸能を学習することは、換言すれば地域文化を守る闘いなのだと強調されてよい。少なくとも教育学が果たすべき課題は、経済的自立と青年の主体性の課題の他にも、地域の共同性の再形成や、地域生活における多種多様な『わざ』の習得分析など、人間が地域で主体性をなしていく伝承の内実に関して、深めるべき課題がいくつも残されたままである」と述べる。

そしてまた、「『沖縄の心』を具現化するシマ社会の社会教育実践には、今日の子育て困難や青年の自立の課題に対応して、各地の伝承文化の価値を見直し、文化と人間形成を結びつける学習が埋め込まれていた。沖縄には『古い伝統が残っている』と言われる。しかし、それは単なる伝承ではなく、人間が成長するための主体的、積極的な文化創造を可能にする『残し方』でなければならない。」とも述べる。

おおむね同意できる提起である。と同時に、私には、アトランダムに書くと次のような、著者の次の作業、いいかえると、沖縄にける青年会の発展のための提案についての期待がある。

1) 事実として、民俗芸能が、沖縄の青年会のなかで重要な位置を占めるということの分析を行った本著の価値は相当に高い。と同時に、民俗芸能は重要な位置を占めるが、青年会が行う活動の一つである。他の活動をどうとらえ、それらと民俗芸能との関係をどう把握するのか。

たとえば、地域での仕事起こし・地域起こし、またかなりの若者たちが熱中し、各地の青年会が取り組んでいるスポーツ、また、40年前の青年会の中心的活動の一つであった「復帰運動」などの政治的課題、などについてである。

2) 民俗芸能の内実にわけあって、どのような民俗芸能をこそ伝承し、創造していったらいいのか、またその伝承創造過程についての検討・提案を期待したい。これについては、すでにいくつかのところで指摘したことがある。

3) 郷友会について分析した6章で「本土文化が沖縄で平準化された1980年代後半になると、本土からのまなざしで『故郷の発見』学習が開始する」とのべていることにかかわってである。

この認識は、一つの面をとらえている。その本土文化は、実は経済成長至上主義、というか企業社会の文化、あるいはマスメディア文化にかかわるものである。たんなる本土文化ではない。そうしたものに対して、どう考えるのか。私も1980年代後半が、沖縄の子ども・青年をめぐる大きな転換が一般化する時期だと考えている。しかし、それを本土文化による「平準化」とはとらえない。

また、もう一ついうと、沖縄の教育界が、100年にわたって、いやもっとさかのぼると、400年来「本土化」を追求してきた結果として、「沖縄独自の文化」の希薄化という事態が、1980年代に一般化し、もはや「沖縄独自の文化」の展開が「警戒すべき対象」ではないレベルに達したということでもある。だから沖縄的なものを学校で扱っても「危険性」が薄くなったという認識が成立し、沖縄文化を「鑑賞」「文化財保護」対象として、あるいは「観光」対象として取りあつかう傾向が、それ以前にもまして一般化したということである。

それらの「鑑賞」「文化財保護」「観光」化に対抗していく課題をどう追求展開するかが、重要なテーマとして浮かび上がっている。

こうしたことに対して、著者の提案を期待したい。こうした期待をもつのは、沖縄の若者について、また沖縄の社会教育について、本著がすばらしい開拓作業を行っているからであり、今後のさらなる発展を期待するから

である。

すごい蓄積と示唆が多い「沖縄の字公民館研究」報告書（2009年1月28日）

12月にこのブログで連載した山城千秋さんの「沖縄の青年会」についての研究書に、「沖縄の字公民館」についての共同研究報告書が、しばしば登場していた。その研究代表者の松田武雄さんは、現在名古屋大学教授だが、1980年代半ばから後半にかけて、琉球大学での同僚であり、個人的にも親しくさせていただいた。そこで、かれに、その研究報告書はどうしたら手に入るのかをお尋ねした。

すると、彼から分厚い報告書が送られてきた。感謝である。

平成14、15、16年度、そして18、19年度の科学研究費補助金による研究報告書は、A4大で、あわせて700ページあまるページ数だ。これは読みきれないから、飛ばし読みするしかないな、と思っていたが、目を通しはじめると、飛ばし読みすることができないものが各所に溢れている。結果的にほぼすべて目を通す流れになってしまい、現在ようやく半分ぐらいにいたっている。

それだけ、沖縄の字公民館には深いものがあり、また独自性があるからだろう。字公民館にかかわるいろいろな分野にまたがり、また中部北部八重山地域が多いのだが、たくさんの公民館を実地に訪問し、数々のインタビューを重ねている。参加した研究者もいくつもの大学をまたがるだけでなく、フランスからも参加して、総計10人を超している。

残念ながら、私が住む南部地域については少ないのだが。

この研究は、沖縄自身にとっても重要な問題提起をしているように思える。それは研究上だけでなく、実際に字公民館にかかわる人々にとってもそうである。その意味では、この研究がどのように、公民館現場に還元されているのか、されていくのか、にも注目していきたい。

私自身は、こうした研究があること自体を、この報告書に触れるまでは知らなかった。私に関心をもつ沖縄の地域起こしにとって、いくつもの重要な示唆があるよう感じがしてならない。また、沖縄に限らず、理論研究的にも注目したいことがいくつもある。

そんな私なりに気づいたことを、これからゆっくと連載しながら、のべていこうと思う。

字公民館本2 シマの歴史的変化とのかかわり（2009年1月31日）

全体を通して、社会教育研究者たちが、このように沖縄の字（村・シマ）に関心を寄せて検討しているのに敬意を表したい。その作業を私がこれまでまったく知らなかったことが残念だ。

私が知っている従来の社会教育研究に対して、新たな世界を発見創造しているように思う。それだけに、今後どのように展開していくかに継続的に注目していきたい。

ところで、この報告書は、字（村・シマ）に焦点をあてているのだが、その歴史については、ほとんど触れていない。今後の作業展開に期待したい。

ここでは、私なりの把握で少し考えてみたい。

まず、現在、というよりも近年までの字（村・シマ）の形は、17世紀後半から18世紀前半に作られたと私は考えている。現在の字（村・シマ）が古くから「変わらず」存在していると、無意識にとらえてしまう発想があるが、そうではない。それ以前の村・シマを薩摩＝首里王府支配体制のなかでこの時期に再編したのが、今日につながる村・シマの一つの原型だと考える。

そして、近世末期から明治後期にかけて、多少の再編をくり、戦前支配に対応する村・シマがつくられる。

沖縄戦時と戦後復興・基地支配とのかかわりでの再編が行われるが、字（村・シマ）は、住民自身の自治的対抗基盤として作用した面が多いので、戦前支配に対応する村・シマとの継続性がかなり強い。

※ この点はいろいろなところで、戦後戦前の継続性断絶性という問題として、検討対象にしなくてはならないと考える。私は教育界の問題として、少しだが問題提起してきた。たとえば「沖縄教育の反省と提案」（1983年明治図書）

次の大きな変化は、1980年前後に鮮明になってくる。都市地域ではもっと早くそれより10年も前になることもある。また、小離島を含めて非都市地域では、もっと遅く、今日なお、その要素を強く残しているところもある。

その変化は、まずはシマを支える産業構造の変化にみることができる。

また、人口移動が激しくなる。本土や都市地域への移出が日常的に見られるようになる。10歳代後半ではそれが通常になりさえしたシマもある。

と同時に、激しい移出の後、地域によっては、Uターン現象もでてくる。Iターンも含め、そのシマとはかかわりのない人たちの移入が増加するシマも、都市・都市近郊を中心として見られるようになる。

また、シマの人々をつなげるものとして、シマに住む人々「全員」の「平等」のかかわりという構図の比重が低下していく。そしてシマの自治組織に加入していない人々が増加していく。シマが全員加入制のコミュニティではなくなっていくのである。

こうしたなかで、人々の生活実態としても、生活意識としても、コミュニティとしてのシマから離れる傾向がでてくる。コミュニティのつきあいなどに「束縛」を感じる人も増える。

※ 余談だが、人々の暮らし・人々のつながりに深く広く触れているこの報告書のなかで、門中がまったく出てこないのは、なぜなのだろうか。「出てこない」ということも、考えてみなくてはならぬことになるだろう。

こうしたシマの変化のなかで、たとえば育児・教育について、シマの占める比重が大きく変化していく。報告書のなかで、そのことをわかりやすく示しているのは、南風原の喜屋武の世代ごとのインタビューである。その報告の執筆者である上野景三は「学校の影響力の変化」として指摘し、「60～40代にかけては、学校が喜屋武の子どもたちに及ぼす影響力というのはさほど強く感じられない」が、「30代になると、必ずしも喜屋武の人間

関係が支配的ではなくなり、むしろ学校での友人関係が支配的である」と述べている。その変化の時期は1980年ごろである。

教育が、シマによる共同のものであるという比重が低くなり、家族・親が行う比重が高くなるのだ。それは、沖縄のおおよその傾向として、「教育家族」が多数派を占めるようになる時期でもある。

こうした時期に前後して、字誌の発行が増えるのだが、それは字（シマ）の強さを示すとともに、字（シマ）の存続継承への危機感というものがあつたことも示すというケースはないだろうか、という疑問も湧いてくる。

そしてまた、この本でもしばしばでてくるが、私もよく使う用語でいうと、アソシエーション的なものをつくって、コミュニティのシマを継承復活させようという動きも、この時期以降広がっていく。その典型が、この報告書でもしばしばでてくる、浦添市内間、とくにその青年会である。

字公民館本3 地域福祉と字公民館（2009年2月2日）

この研究の一つの柱は、地域福祉と字公民館のかかわりである。二つの指摘を引用しよう。

「沖縄の字公民館は、教育固有の領域よりもむしろ、祭祀、芸能、行事等、多様な集落の自治活動から成り立っており、地域福祉も包摂する活動態であつて、社会教育の概念を再考するためのフィールドとしての意義を有している」

「沖縄の字公民館は、社会教育と福祉の入れ子的構造を持って発展してきたが、近年はその様相も変容してきており、相互扶助的な弱まりと現代的な地域福祉活動の新たな組織化が見られるのである。」

その通りだと思う。私近辺の公民館もそうであるし、むしろ「社会教育」的色彩は薄いといったほうがいいかもしれない。

2、3日前に聞いた話だが、30～40年前、字公民館で保育園的なこともしていたという。

相互扶助的な地域福祉は弱まっているという指摘もうなづける。都市地域だけでなく、農村地域においても、それをどうしていくのか、という課題に直面している。集落の結合が弱まり、人々の関係性が薄まり、福祉的活動を必要としている人たちの孤独傾向が強まる傾向があるだけに、福祉的必要性が増しているときえいえるかもしれない。

それに対して、自治体などによるサポートを大きくすることも必要だが、地域のなかに主体的に福祉機能を創造することも必要になっている。その意味では、ボランティア活動も含めて、「結社」的色彩をもった組織による、コミュニティ活動の必要性が増しているようにも思う。

サポートが必要な高齢者へのデイサービスを、高齢者のなかでもやや若い人たちがボランティア的に支えているある字の例が紹介されているが、それも一つの興味ある例だろう。また、世代間交流のこともでていたが、それを日常の福祉的活動のなかに積極的に位置づけていくこともあろう。

字公民館本4 青年会 伝統芸能 地域激変と「はみ出し者」(2009年2月4日)

青年・青年会にかかわる研究報告が何本か収録されている。それらは、いずれも12月に紹介した山城千秋本と重なるものを多くもっている。

一つは、青年会とエイサーなどの芸能とのかかわりである。山城本で論じられた浦添市内間青年会だけでなく、金武町並里区の事例が詳しく報告されている。その報告では、「伝統芸能のゆるやかな世代間継承がなされ、断絶と継承の繰り返しによって、今日の並里の伝統芸能が成り立っている」

「もともと旧盆に祖先供養のために踊った伝統的なエイサーを大事にする人々にとっては、現在のショーアップしたエイサーは、本来の意味から離れているのではないか、という思いがある。一方、青年たちにとっては、伝統の型を守るよりも創造的に楽しく自己表現したいという気持ちがあるだろう。両者の間にずれがあり、それはエイサーに限らず、伝統芸能についても言えることである。」と述べられている。

こうしたことは、いろいろなところで行われている沖縄の「伝統芸能」についてもいえることである。

その「伝統芸能」の型にはすべて、それが創成された時があり、その時には、上にのべたような「ずれ」や葛藤があり、かつ創造があったはずである。伝統継承とは、たんに同じことを継承するのではない。同じことを継承するとなれば、「文化財保存」になり、人々の生活文化とは距離がつくられていく。

その意味では、伝統とは常に再創造であり、その際には、「ずれ」が生じ、そこをめぐっての葛藤があって、それらが再創造につながっていく。

その点では、青年を含めて人々の生活のありようが激変している現在は、近世末期から明治はじめにかけて、あるいは大正期？、あるいは戦後まもないころとならんで、再創造の重要な時期であると、私は推理する。それ以前は、17世紀初頭であり、18世紀中頃であろうと、私はこれまた推理する。

青年の生活文化と地域コミュニティとの距離が、従来の変化と比べても極度にすすむ、つまり激変状況にある、今日の事態のなかで、これらの「伝統芸能」への関心が逆に高まっていることにも注目しなくてはならない。

このような激変にかかわって、浦添市内間青年会の再結成を中心に担った人のライフヒストリー聞き取りは興味深い。「まだ都会化しない自然環境のなかにあった内間の原風景を経験している」彼が、地域と青年たちの激変状況のなかで、青年会・エイサーの復活に取り組んでいくのである。

そこには、ある種の危機意識が存在する。危機意識が、こうした積極的な創造を生み出すことはしばしば見られることである。その意味では、危機意識が広汎に成立する状況が、今日の沖縄には存在するともいえよう。その危機意識を地域起こしへとつなげていくかどうか、今日の沖縄の重要なポイントになっているともいえよう。

この激変状況のなかでは、より困難な事態にあるものたちが、苦難をよりこうむりやすいが、内間青年会再結成が、そこに一つの焦点をあてていたことが大変注目される。

「青年会づくりの最初に、はみ出し者が公民館に集まっていたことが重要なんです」と、その彼はいう。「はみ出し者」を取り締まる発想はいたるところにあるが、彼らを主体として組織していく発想は大変少なく、その意味でも注目しなくてはならない。

このブログでも何度か、80年代以降の沖縄は、本土基準のストレーター秩序のなかで、その秩序のより「いい位置」にのることに焦点をあわせて動いてきた傾向がすごく強まった。そのなかで、「はみ出し者」にも、その秩序にのる圧力が強まった。そうではなく、異なる秩序があつていい、というメッセージを出したという点で、

大変注目されるのだ。

これは、今日の沖縄づくりのありようとも深くつながる。その詳しくはいずれ述べよう。

字公民館本5 青年・青年会 就職・自立 Uターン 沖縄おこし(2009年2月5日)

沖縄の青年たちの多くは、本土就職するが、それほどの年数もたわずにUターンする例が多い。たとえば、八重山では、20代前半の人口が2010人なのに対して、20代後半は2946人と増える。このことについて、山城千秋は「雇用状況が厳しいにもかかわらず島帰る青年の『島への誇り』」「現実課題に危機感をもちながらも、島の将来像を懸命に模索する姿」に注目している。

この本でも紹介されるが、沖縄の進路指導が進学指導に片寄り、また県内就職だと公務員志向がきわめて高く、県外就職に消極的であるという事情がある。こうしたなかで、青年の無業率は高い。にもかかわらず、学校でのキャリア教育は弱い。

こんななかにあつて、青年会は、「沖縄がいい」と思える価値観形成に影響を与えている。しかし、仕事の話よりもエイサーなどが話題にのぼりやすい。Uターンした青年たちの満足度は高いし、近年ではIターンの青年たちもおり、なかには青年会に加入しているものもいるという。

以上のような状況指摘をしながら、青年会が「異業種交流の場である」点に注目できようとも述べる。

さらに、「フリーター、ニート、無業者などの青少年の労働問題が研究的に分析・検証されて久しい」が、『浮遊』する『流動的』な青年に特化され」ている。それに対して『青年と地域』、そして『青年会』という社会教育研究の重要な視点から、改めて青年の労働と生活をとらえかえし、自立支援」について考察したいと、興味あるアプローチをしている。

そして「青年会活動から就労機会創出への発展が重要だ」と語り、次のような金武の事例を紹介している。

「2003年に子どもたちの自然体験のための『ふくらしや自然体験塾』という有限会社を起業した。さらに、2005年には町全体での観光業振興を目的とした『NPO雄飛ツーリズム』へと発展させ、町立のネイチャー未来館という施設の指定管理をうけ、若者・青年の雇用機会を創出する努力を行っている」

このような状況分析と提起に、私は共感する。従来の問題指摘は、「沖縄の青年の就職率の低さ、過剰な公務員志向、本土就職を避ける傾向、本土就職しても戻ってくる。」といった否定的トーン、なしいは本土基準での把握が多かった。それに対して、「島起こし」「仕事起こし」に青年・青年会自らがかかわっていくという志向を強くもった指摘だからである。

沖縄は、全国各地の状況から類推すれば、人口減少・過疎の進行が起こりやすい地域ということになるが、実際にはそうはなっていない、人口減にはなっていないが、そのスピードは抜群に遅い。

そこに何があるのか、ということを考える必要がある。たしかに、金銭額上からいうと、沖縄の所得などはかなり低額だ。しかし、そうした形での金銭額ではかりきれない豊かさ、魅力が沖縄には存在している。と同時に、「沖縄起こし」をしたいという志向がかなり強い。

にもかかわらず、これまでの施策が、そうしたものにかみあわず、「沖縄起こし」志向を育てるものとはなりき

っていない、ことの方に大きな問題があるのではなからうか。

字公民館本6 字誌とフランスの共同的生活史 (2009年2月10日)

本研究報告のなかで、大きな比重を占めるのは、字誌についてである。沖縄の字の30%くらいが字誌を出しているという。昨年10月の県産本フェアでも字誌コーナーが設けられていた。私も何冊か買おうかなと思ったが、価格が高いし、近くの図書館でも読めると思って、買うのはやめた。玉城では、現在4つの字が出しており、最近も一つの字が発刊の運びになっているようだ。

これらは、この報告書でも書かれているように、市町村史のつながりのなかでだされるようになったケースが多いし、スタイルは、市町村史風である。

そうした字誌に対して、この報告書は、フランスの共同的生活史との比較というまったくユニークな視点から検討を深めている。そして、共同的生活史に取り組んでいるメンバーもフランスから沖縄に来て、シンポジウムに参加し、報告書にも執筆している。

私自身は、この共同的生活史というのはまったく知らなかった。ただ、ここ20年ぐらいか、世界的に注目され広がっているナラティブ的な取り組みとつらなり、その多くは社会構築主義的要素を多分にもっているようだ。そう考えると、私にとって多少はなじみがでてくる。

ただ、字誌の制作者・執筆者たちには、そのような問題意識があるわけではなく、それらは、あくまでも研究報告者たちの視点であるのだが。そして、字誌の制作者・執筆者たちは、情報提供者であり、これらのフランスの共同的生活史のように、研究メンバーとして加わって研究報告をしているわけではない。だから、その方たちの見解はわからない。

※ ただし、字誌作成をサポートしてきた方が一人、この研究メンバーに参加しておられるが、この比較についての対応の記述は登場していない。

さて、この比較は、いくつかの点で注目される。

一つは、フランスの共同的生活史が、教育的意図の存在、実践性大、集団の意味の発見と構築、客観的知識・学問を主たる問題にしない・経験の重視、とされるのに対して、字誌が、教育的意図の不在(希薄)、実践性小、集団の記録・村の復元、経験的だが、学問志向、とされることにある。

その通りであろう。これは、各々がもつ性格・目的からして異なるから当然だろう。その意味では、比較そのものが、かなり外在的な性格をもっている。当事者が比較に希望しているわけでもなく、比較に意味を見出しているわけではない。

にもかかわらず、この比較を行ったということは、研究報告者たちの強い興味関心、そして、間接的な形であるにせよ、字誌の制作者執筆者などの関係者に対する、強い願い・期待・提案といったものを背後にもっているからであろう。

だから、字誌が広汎の住民が作成に参加していることに注目しているのだ。そして、それが客観的事実のみに

とどまっているのを「惜しむ」トーンが強烈に存在している。社会教育的意味をもって、作成者たちがかかわっているわけではないのにもかかわらず、社会教育的な意味づけと提案を行っている。

とすれば、この研究報告書の裏側に、ないしは、報告書発行後の継続的な課題として、かなりの取り組み・働きかけが行われているだろうと、容易に推測できる。そのあたりを知りたいものだ。

この報告書に登場してくる字誌についての調査事例は、読谷など中北部が多い。かつ、軍用地の存在とからんだ一定の財政基盤があり、それをもとに本格的な字誌を作成した事例が多い。私が住む南部では、字誌は少ないという。私が住む玉城では、2～3割といった感じである。ちなみに、私は、住んでいる字中山の人たち相手に、酒飲み話でのことだが、「中山物語」を芝居やミュージカル風にやりたいね、といつも語っている。そして、しばしば昔話を聞いたりもしている。玉城村史には、民話編があつて、年長者からの聞きがたり記録がある。それをもとに、私が話すと、そんなことは知らないという人ばかりだ。

と同時に、私は、「字起こし」「玉城起こし」「南城起こし」「沖縄起こし」に強い関心をもっている。そしてそれを、「人生起こし」「地球起こし」と結びつけて考えている。そんな意味では、フランスの共同的生活史のアプローチは興味深い。

こんなことに似たこととして、シュガーホールでの地域オペラづくりは興味深い。地域の実在の人物をもとに物語をつくり、オペラをつくったのだ。「肝高のあまわり」などもそうした流れとつながるだろう。

今、必要なのは、沖縄の地域・字の歴史を、「考古学」的に復元するにとどまらず、地域起こしの文脈のなかで、今日という時点で創造していくことだ。

その意味では、この研究報告は興味深いものがある。と同時に、研究者たちが、どのような提案・実践を行ってきたか、そして今後行おうとしているか、そのことに強い興味が抱かれる。その作業がなければ、「情報の収奪」的傾向の強い近年の沖縄研究の多くと同じことになってしまう。

もう一つの注目点は、コミュニティとアソシエーションとか、個人と共同とかいう用語を使って行われている分析についてである。それは、次回だ。

字公民館本7 字誌 個人 共同体と結社 (2009年2月12日)

沖縄の字誌制作にかかわって、そこでの個人・共同体・結社などという問題にかかわって、いろいろと言及されている。いくつかを紹介しよう。

1)「字誌が集落の総意によるとはいってもその実質的な発案や具体的な編集過程およびその後の刊行に至るまでの経緯では、必ずしも共同体的とはいえない結社的な展開が見られる。沖縄の集落で結社的な要素が拡大しながら、それを共同的要素が包み込んでいるという指摘をしたように、字誌の成り立ちの基本に関わることでありさらに検討の余地が残されているというべきだろう。」第一集P12

2)『専門家ではない歴史の素人たる地域の住民がつくった市町村史(地域史)』として、高い評価の対象になることはよく理解できる。しかし、ここでこの見方にあえて異を唱えてみたいのは(中略)、この傾向がゆえに個

人ないしは共同的に見つけだされる『価値や意味』を自己表現し問題適（マ）しようとする要素が後退するのではないかということである。」第一集P16

3)「沖縄の演劇や音楽の活動は日本の他の地方に比べてもはるかに活発であるというべきであるが、新しい動きは都市を中心にして展開しておりシマ社会の生活や伝統による縛りからは解放されているように見える。宜野座区のように古典の組踊りに加えて現代劇の組踊りが作られたりする例もあるが、辺野古区のように一時途絶えていた芸能を復活させることに関心が集中するというのが、全般的な動きではなかろうか。このことを批判するつもりはないが、このような傾向はこれらの取り組みを内側に閉じ込め外に向けて自己主張する要素を薄める原因になっているように思われる。」第一集P16

4)「第一に指摘されるのは、字誌がシマの共同の事業として展開する公共の事業であり、そこに個人的な意見をさしはさむ余地が無いことである。しかしより根本的な理由として第二に、東洋の社会とりわけ沖縄では西洋の社会との原理上の違いがあることが強調されるべきだろう。後者が『結構』を原理とし、自律した個人が作る集合体として集団が成立するのに対して、前者では個の存在は集団ないしは共同の生活の中に隠されている。住民は共同の生活を維持するために個としての自分を表現することについて、一定の制限を加える場面が多くあり共同の語彙を自分よりも優先させることが多い。」第二集P38

5)「私のこの間の関心は、フランスの教育的共同生活史の議論を基に字誌を考えてみることにあった。その前提は『共同性』を強調することの多い沖縄のシマ社会にも、やはり『私』ないしは『個人』が存在するのではないかということであった。そしてうえて見た今回の共同調査での経験は、こうしたヨーロッパモデルを沖縄に応用しようという方法的な意味と限界を改めて明らかにしてくれたように思う。」第三集P62

こうした問題提起に私が注目するのは、私自身がそのシマ社会に生活し、個人・共同体・結社といったテーマの渦中にあるということがあるし、この問題は現代沖縄にとって重要なテーマであると私自身も考えるからだ。

この問題提起は重要であることに異論はない。しかし、5)にも多少触れられているように、この問題へのアプローチとして、字誌を素材にし、ヨーロッパモデルを応用するということが適切であったかどうか、は問わなくてはならない。

その意味では、シマ社会をめぐる、もっと他のものを素材にした研究が必要ではないか、と思う。字誌については、2)でも触れられているように、フランスの教育的共同生活史と対比して検討する素材ではないからである。この対比をするなら、もっと別のものを選定すべきだろう。無論、かなりの無理を承知で対比することによって、字誌制作にかかわる人々に対して、新鮮な問題提起を与えたといえるかもしれない。

上記の一連の紹介文の底には、共同体ないしは共同的なものから、個人をいかに生みだすか・つくりだすか、あるいは結社的なものをいかに見出すのか、つくりだすのか、それらとは対照的に共同体ないしは共同的なものに対して、肯定的には言及しない、というものが存在しているように思う。そのテーマは、現代のシマ社会を見るうえで、有効ではある。では、共同体ないしは共同的なものをどうするのか。そのあたりの言及がなければ、シマ的なものは否定的なものとして、読者にはとらえられかねない。執筆者によって多様性があるが、そのあたりはどうか。

シマ社会が、それを肯定するのか否定するのか、その評価は別にして、沖縄社会のなかでは、かなりの重みをもって「今なお」存在している事実がある。そのシマ社会の解体を主張するのか、それともその再編・改編を主

張するのか、その際に、結社的なものと共同体的なものとの関係をどう把握するのか。そして、個人と結社・共同体との関係をどう把握しつつ、提案していくのか。

興味深い問題に迫りながらも、こうしたことに対するイメージが読みとりにくいものとなっているのが、私としては残念である。

なお、私自身は、こうした問題にかかわって1980年代半ばから、教育実践に焦点化して、たくさん述べつづけてきた。その際、共同体と結社という対比もあるが、制度と結社、全員加入制と任意加入制などという対比も使用してきた。最近のものでいうと、「〈生き方〉を創る教育」(大月書店2004年)を参照していただけたら幸いである。

字公民館本8 集落(字)育英奨学活動 (2009年2月13日)

一連の論文のなかで、一つだけこのテーマを扱っている。20年以上前にいろいろとお世話になった小林文人氏のものである。字誌などによって、戦前戦後を通して、集落の育英奨学活動を検討している。

本論の最後に、次のような指摘がなされている。

「第二は、沖縄独自の伝統的なユイマール(結い、相扶の交換)やモヤイ(模合)の思想や意識が、集落組織を基盤として、育英会活動に息づいているのではないか。近代公教育制度に向けての進学・育英への協同の取り組みは、いわば「学校模合」とでも言えようか。

第三は、学事奨励会から育英会制度への歴史的系譜、さらにその継承と発展の流れに注目しておきたい。現代の育英奨学制度が次なる集落共同活動への歴史的展開を呼び出していく可能性もみえてくる。具体的に、集落育英会の奨学金貸与は、歴史的に継承され蓄積されて、集落の資産として次なる活動の共同資金となっていくに違いない。

第四に、集落共同の社会的・教育機能としての育英奨学制度は、曲折をたどりつつ、そのことを通して、集落(シマ)の社会的結合に大きく寄与してきた側面があった。」第3集P19

「学校模合」とは、「言いて妙」である。この育英奨学は、とくに戦後かなり活発に行われたことである。それは、戦争による集落(シマ)の危機的状況を、集落共同の取り組みのなかで、乗り越えてきた集落が、さらなる発展を期して、「集落を担っていく」ないしは「集落を内外から育て励ましていく」存在として、集落の子ども・若者への期待が反映しているといえよう。

こういう意味で、育英奨学は、「シマ起こし=地域起こし」と結びついていたのである。そしてまた、子ども・若者の教育の担い手として、集落がかなりの部分を担っていたことをも意味していたのである。

しかし、「復帰」後、とくに80年代以降、事態が大きく変化していく。教育の担い手としての集落の位置が急激に低下していくのである。それに代わって、家庭が果たす位置が急激に高まり、圧倒的に家庭が支える「仕事」となっていったのである。

かつて、東井義雄が、高度経済成長にはいる時期に、「村を育てる学力」という問題提起をしたが、それは「村

を捨てる学力」になっている事態を憂えたからである。その憂いが、沖縄の場合、1980年代には一般化していく。

このプロセスは、育英奨学だけに限らない。シマ（集落）そのものが弱体化していく過程と並行していた。無論、そのなかで、逆にというか、だからこそ、というか、シマ（集落）の「復活」をはかる動きも、限られてはいるとはいえ、芽生えてくる。そこにところに著者は「可能性」を見出し、「期待」しているのであろう。

だが、「シマ」にとって事態は厳しい。と同時に、このところの経済状況のなかで、「シマ」に戻る、「シマ」をあてにしたい人々が激増することが予想される。典型的には「キセツ」からもどる人たちである。そうしたなかで、どのような「シマ」の形成が期待できるのか、あるいは「シマ」の形成に期待すべきではないか。

それは、一つ前の記事で書いて、コミュニティとアソシエーション、そして個人の問題を、「シマ」とかかわってどうとらえるかとも深くかかわる。

字公民館本9 シマ起こし 私の個人的関心 スーマチ（2009年2月14日）

私自身がいま、「シマ」に暮らしている。他の大部分のシマと比べたら、人口移動が少ないところだ。「シマ」以外からの移住者は、Uターンを除くと、10%ぐらいにとどまっている。いろいろと聞いていくと、歴史的に継承されてきた行事の継承が難しい状態にある。私の単行本「沖縄田舎暮らし」では「ジーハンタ」という四年に一回の総出の行事を紹介したが、その他の行事ということでは、綱引きぐらいにとどまっている。青年会も休業状態が長い。

ということで、かつて存在していた行事の復活も含めて「シマ起こし」についての潜在的な関心があるように思う。私がいろいろとたずねると、喜んで語ってくれる方が多い。先日もたくさんのお話を聞いた。また、南城市全体を通して、「シマ」の継承・復活・発展も含めて、町起こしが大きなテーマとなっている。ということもあって、2年前の南城市と琉球新報の共催で行われた「南城起こしシンポ」に、私はパネリストとして参加した。その後も、南城市のそうした集まりがあれば、できるだけ参加するようにしている。このような私の個人的関心もあって、今回の一連の報告書は大変興味をもたされ、ヒントをえようとするなかで、こんなに長い連載になってしまったのだ。

さて、報告書の「発刊にあたって」で、研究代表者の松田さんは、こんな風書いている。

「学習機能に専門化してやせ細った嫌いのある公立公民館に対して、専門化した学習機能は弱いものの、自治活動と文化活動が融合し地域の共同性に働きかけることを通じて学んでいる字公民館の経験は、現代公民館論の構築に有益なものとなるのではないだろうか。」と提起している。

そして、金武町並里公民館、首里石嶺町での調査経験もふまえて、具志川市の上平良川公民館について報告している。

また、小林氏は、読谷村の、楚辺の字誌づくり、大添公民館づくり、ざきみ文庫と座喜味子ども会の報告を、それにかかわる人々のライフヒストリーにも関心をよせつつ、報告している。

読谷村については、昨年6月に社会教育関係者多数の参加で、社会教育諸団体の旺盛な活動展開をつくりだす

ためのワークショップを、私自身がコーディネーターとして行ったこともあって、興味深いものがあった。関係職員は年々難しくなっていると話されていたが、読谷村は、個人としても村としても長年の蓄積がとても大きく、すごい力量をもっているとその時感じた。

このように、この報告書は、「シマづくり」「地域づくり」に関心をもつ私にとって、貴重な示唆をたくさん与えてくれた。そしてその中味としての、「自治活動と文化活動」の「融合」した展開をいかにすすめていくか。そしてそのなかでのライフヒストリー形成にそれらの活動がどのようにかかわっていくのか。そこには、伝統の継承ということだけでなく、新たな創造的側面が多様に存在している。

そこには、その「シマ」に生まれて以来ずっと住んでいた人ばかりではない。たとえば「シマ」に住む女性は、今日では、その大半が「シマ」以外からの移住者である。その女性たちが、字公民館で多様に活動を展開していることに注目したい。と同時に、「シマ」外から移住してきた男性・家族も近年では多い。都市地域では、その方々が多数を占めることさえある。今日も、私は別の報告が紹介していた南風原町の喜屋武に所用ででかけたが、そこも各地から来た方々が多そうである。わが集落近隣でも、移住者が「シマ」人口の2～3割以上を占める例は、珍しくもない。

そういうなかで、「シマ起こし」をどう展開するのか、それは新しい創造の課題である。連載の別の記事で書いた「結社と共同体」という問題はそうしたことに深くかかわる。またシマの共同性のなかで個人がどうかかわるか、ということもそうである。読谷の報告のなかで登場してくるライフヒストリーなどはそのことと深くかかわる。

そのあたりについて出された問題提起と、多様膨大に報告されたケースとをつきあわせる分析は、今回の報告書のなかではほぼ記述されていない。それについては、これからの課題として存在しているように見受ける。今後の展開を期待したい。

※ 読谷の座喜味についての報告のなかで、「総巻スーマチ」の報告がでてくる。このスーマチに私は関心をもっている。南部地域では、大型行事としては、エイサーよりも、このスーマチが各地で存在していたが、近年ではごく限られたものになっている、と聞く。そしてそのことを惜しむ話をよく聞く。私の住む中山も、他のシマから、技を「盗み」にくるほどのところであったという。この話を40代後半以上の方にとすると、記憶に残っており、生き生きと話されることが多い。

ところで、私が聞いたところでは、スーマチは「潮巻」の意味で使用されていた。潮が渦巻くようにして行われるからだ。

そこで、スーマチをインターネットで調べたら、2006年12月に座喜味で16年ぶりに復活させたという琉球新報の報道を見つけた。そこでは、スーマチの語源としては、「渦巻き」と「総巻き」の二つの説があると書かれていた。

松田武雄『現代社会教育の課題と可能性』を読む（2009年3月18日）

1980年代後半に琉球大学で同僚であった著者から贈呈していただいた本にやっと目を通した。九州大学出版会から2007年に発刊された本だ。

先に、同じく同氏から贈呈された沖縄の字公民館にかかわる膨大な研究報告について、このブログに長期にわたって記事を連載したが、なぜ著者たち社会教育関係者が、沖縄の字公民館に関心をもつのか、この本を通してわかった感じがする。沖縄の字公民館のもつ特異性、肯定性に著者たちが注目しているからだし、全国的に社会教育、公民館が転換期的状況にあるなかで、沖縄の字公民館が注目すべき位置にあるということなのだろう。

さて、私個人は長い間、社会教育については疎い状況が続けてきた。今、南城で、あるいは中山で、私自身が追求していることが（それ以前から、ここ20年余り追求してきたことも含めて）、実質的に社会教育と深いつながりがあったとしても、それを社会教育との関係で理解しようとはしてこなかった。しかし、本書を読んで、著者たちと私がかかなりの程度、関心と課題を共有していることがわかった。それだからこそ、山城千秋本に加えて、著者からお送りいただいた沖縄の字公民館研究報告について、長期連載したのだ。

「全国的に社会教育、公民館が転換期的状況にあるなかで」と書いたのは、本書のなかで、たとえば次のようにのべられている状況を指している。

「いま、公民館はかつて教育固有の領域に閉じこもっていた世界から、強引に首長部局に引きずり込まれる中で、改めて公民館や社会教育の本来的な機能を自ら問い、社会教育の歴史的原理的な意義、つまり『教育』という言葉に『社会』を冠してつくられた『社会教育』の本来的な意味に即した実践を、地域社会に創造しようとしているとはいえないだろうか」 P 7

また、沖縄の字公民館への注目については、たとえば以下のような記述に示されている。

「沖縄の字公民館をみると、教育施設としては極めてあいまいな輪郭をもっているが、集落の生活と文化・芸能、さらに近年では福祉が融合した公民館活動が展開されている。社会教育のあいまい性がそのまま残されており、社会教育の専門職制度はなく、意識的な教育作用とは弱い、社会教育が元来もっていた社会性が息づいている。社会教育が公民館内に籠もることなく、地域の共同関係、ネットワークと結びついた開かれた機能をもっているのである。」 P 10

もう一カ所紹介しよう。

「自治組織と一体化した自治公民館は、権力支配の末端機関に化すおそれ、教育・学習機能の自律性への疑問という観点から批判され、軽視されてきた歴史を持っている。沖縄の字公民館もそのような問題性を孕んではいるが、伝統的な行事や芸能が字住民の求心力となって、崩れようとする地域の共同性を立て直す内発的なエネルギーが断えず生み出されている様子を見ると、一部の住民の学習・文化活動の場となりがちな公立公民館に対する一つのオルタナティブを示すものとなっているように思われる。学習機能に専門化してやせ細ったきらいのある公立公民館に対して、専門化した学習機能は弱いものの、自治活動と文化活動が融合し、地域の共同性に働きかけることを通じて学んでいる字公民館の経験は、現代公民館の構築に有益なものとなるのではないだろうか。」 P 196

松田本のなかでは、社会教育とコミュニティとか地域福祉とかいったものとの関連が注目されている。たとえば、小林文人の次のような指摘に注目している。

「東アジアの社会教育は、ヨーロッパの成人教育と比較して、明らかに地域（コミュニティ、社区）教育としての特質をもっている・・・教育組織としての性格が曖昧でごった煮的であるとしても、体育・レクリエーション活動や地域福祉活動との関連性や多面性をもっている。」

また、佐藤一子の「adult education と community education の双方の側面をもつものとして日本の社会教育概念を理解することが適切である」という指摘にも注目している。

さらに大橋謙策の次の指摘も紹介している。

「公民館主事論として、コミュニティ・ワーカーとしての職務を提起した。大橋は、社会教育法の規定が『いちじるしく公民館の活動をせばめた』と述べ、公民館は『狭義の教育、とりわけ言語能力を媒介にした知的認識の発展を教授方法により行うことが中心にな』ったこと、さらに、社会教育法は『公民館の“協働組合”的性格を後退させ、市町村が設置する公共機関の性格を強め』たことを問題点として指摘している」

ふりかえってみれば、私自身の社会教育イメージは、コミュニティ活動的なもの、いいかえれば、地域づくり的なものであったが、実際の社会教育は、大橋の引用にあるように、「知的認識の発展を教授方法による行うことが中心」になっていたようだ。それだからこそ、私個人は、地域づくり的なものを社会教育の枠と関連づけて考えてこなかったのともいえよう。私個人のアプローチとしては、むしろ地域生活指導の文脈で、あるいは地域共同の文脈で考えてきたのだ。

そんななかで、先の膨大な報告書が、沖縄の字公民館をあつかっていることに驚きを感じつつ、また新鮮さを感じたのだった。そして、私自身の問題関心と、著者たちの問題関心の共通性を発見するものでもあった。

南城市の字公民館も、圧倒的にそのようなものであり、教育色は希薄だ。私の住む中山でもそうだ。なにかの社会教育の講座が開かれているわけではない。個人の英会話教室が場所借りをしているくらいだ。しかし、住民自らの動きとして、子ども会活動、私もかかわっている合唱団、ピアノ教室、そして老人会のスポーツ、そしてまたミニデイサービスといったものが行われている。そして、字の集会、豊年祭、行政などの説明会などが行われている。かつては、棒術・獅子舞とか村芝居のようなものが行われていたらしいが、途絶えて久しい。しかし、そうしたものを復活してはどうかと声をかけると、なつかしがる人は多い。例外的なものとして、昨年、シュガーホールの出前芝居が行われたことぐらいしか印象にない。

それは、かつての村屋といわれたものの歴史のイメージをつぐものだろう。そうしたものは、集落ぐるみの場であった。集落の人々の生活は、ほとんどの人が農業を軸にまわっていた時代のことである。それが、時代の変化のなかで、たとえば都市への移動が激しくなり、農業を生業する人のほうが少なくなってくるなかで、大きな変化を遂げ、集落センター（中山では、正式にはこう呼ばれているが、公民館とも呼ぶ）のありようが変化してきたのだろう。それでも、「自治公民館」「コミュニティの中心的機能」に変わりはない。その意味では、「字ぐるみ」の性格を色濃く残している。他の字では増加しているらしいが、中山では、字に所属しない世帯はない。

松田本で描かれているような形、つまり首長部局への公民館の移管というような形での公民館をめぐる基盤変化とは異なる形で、沖縄の字公民館をめぐる基盤変化は進行している。それは、「都市化」のなかでの「個人化」ないしは「市民化」の進行であり、そのなかで改めて「共同化」をどう追求していくか、という課題でもある。

松田本3 公民館・社会教育を共同の地域づくりのなかで考える(2009年3月19日)

コミュニティとしての公民館、自治公民館が、行政の下請け的役割を果たしてきた、果たしているという指摘はおおよそそうであろう。と同時に、地域政治にあつて、地域代表的議員選出ともからんできた。その結果、「地域ぐるみ」の選挙という構図を描くこともあった。また、地域共同作業・行事もかなりの量にのぼる。

そうしたありようを「束縛」「わずらわしさ」と感じ、「ぐるみ」からぬけでようとする人が増えてくる。また、農業を中心とする地域の生産活動とむすびついていた公民館のありように対して、異なる職業につく人、とくに地域外で働く人は、疎遠にならざるをえなくなる。そうしたことを「市民化」「個人化」と名付けることもできよう。しかし、積極的な「市民化」「個人化」というよりは、結果的にそうなっていったという要素が強い。

社会教育の現場、公民館は、地域政治と深くかかわる。だから、社会教育や公民館のありようだけでなく、その背後にある地域政治のありようにも着目しておく必要がある。そうした力学のなかで、政治的にいうと、旧来のありようを「保守」がうまく活用し、そこから抜けでるありようを「革新」がうまく活用したと見られがちだが、必ずしもそうとは限らない。革新でも、結構、組織「ぐるみ」主義があり、また「市民化」も啓蒙主義的要素を多分に帯びていた。保守でも、「市民化」への対応を考える動きが広がり、新自由主義的発想に対して地域から「抵抗」を構想する動きも強力である。

いずれにしても、旧来の「下請け」「ぐるみ」的なありようの基盤が弱くなり、「市民化」「個人化」の基盤が広がっていくことは確かであろう。

それにかかわることとして、松田の次のような指摘は注目したい。

「自治体で策定された生涯学習推進計画の内容について、学習情報の提供や学習相談、ライフサイクルに応じた学習プログラムの提供などが重点的に施策化される場合には、生涯学習の自己実現としての側面、あるいは自己充足的な側面が重視されていると見ることができるだろう。それを経済的な観点から読みかえれば、『人々は、生活の質を向上し精神的な豊かさを得るために、学習機会を購入し消費している』という見方も成り立つことになる。

しかし、私たちは、こうした一人ひとりの市民の自己実現や成長・発達の過程を、消費の過程としてではなく、人権ととらえることによって、『権利としての生涯学習』という考え方を育ててきた。そうした考え方は、『権利としての社会教育』さらには『学習権』という理念の延長線上に位置づくものである。

そのような『権利としての生涯学習』という考え方は、学習活動を自己完結的なものにとどめることなく、他の人々に開かれた共同的なものとして構想する。本来、人権というのは人と人との共同性の上に実現するものであり、他の人々との相互承認に基づいてこそ、個人の自己実現も可能となるからである」

「市民化」のなかでの共同化の追求という課題、あるいは旧来の「ぐるみ」的なありようを変えていく課題を、「消費」的にではなく、自発的共同的なものにしていくなかで追求していこうというのである。そして、そのことを地域の共同生活を展開する場でもある字公民館レベルでも追求していこうということであろう。

それは、私流に言えば、「地域起こし」「地域づくり」を、地域住民の参加型共同型で展開することであり、地

域共同生活、地域福祉、文化・スポーツなど多様な分野にわたって追求するという点でもある。「社会教育」は、そうした地域生活に並行しつつ、あるいは内蔵されつつ進行するものといえよう。

最後にもう一点。

金武町並里の地域調査のなかで、著者が注目した点として、

「並里では、以前は子ども会は小学生のみであったが中学生向けの企画をしたところ中学生が子ども会にジュニアリーダーとして参加し始め、やがてそれを見た高校生も参加し始めて、現在、並里の子ども会は小・中・高校生によって構成されている。そして高校生になれば、青年会に入会することができるのであり、子どもから青年まで地域での活動は継続されていく。」

ということがある。

同様のことは、昨年私が読谷村の社会教育団体の合同研修会で行ったワークショップの参加者にも見られた。中学生・高校生・大学生のジュニアリーダー、そして子育てサポートサークルなどが、青年会・婦人会などとならんで参加しており、「うらやましさ」さえ感じた。

こうした地域の歴史的蓄積に支えられ、地域のストーリーをつくりだすようなありようがもっともっと広がり発展することを期待している。

『おきなわの社会教育』（エイデル研究所2002年）を読む1（2009年4月24日）

編者は小林文人・島袋正敏で、沖縄内外の社会教育関係者数十名が執筆し、沖縄の社会教育を網羅する感じだ。2002年夏に名護で開催された第42回社会教育研究全国集会に向けての出版だ。サブタイトルは、「自治・文化・地域おこし」である。発刊当時、私はまだ愛知にいて、この本の存在も、その全国集会名護開催も知らなかった。たまたま、先日書店で見つけた本なのだ。偶然のことだが、「沖縄子ども白書」とは、沖縄における関連分野を網羅するという点で似ている。

実は、1980年代後半、私が琉球大学に勤務しているころ、地域教育実践集会というのを開いたことがある。様々な分野での実践を交流しようという目論見であったが、報告者を集めるのに苦労した記憶がある。しかし、この本は、実に多様な分野からの寄稿者を集めている。ごく一部を紹介しよう。

金武町並里公民館、屋部の八月踊り、読谷村楚辺の字誌、内間青年会、リュウキュウアユを呼び戻す会、名護ひまわり文庫、今帰仁村歴史文化センター、人形劇団「カジマヤー」、シュガーホール、うないフェスティバル、やんばるの老人クラブ活動、宮古学童クラブ、佐喜真美術館、脊髄損傷者連合会、沖縄児童文化福祉協会、名桜大学……

このように多彩であるだけに、それらが交流協力することで生まれる豊かさは、すごいであろうことは容易に想像できる。と同時に、多彩であるだけに、交流をとおして豊かなものを築きだすためには工夫が求められる。実は、「社会教育専門」の職業に就いている人はとても限られている。教育委員会内の関係部局の担当者の多くは、自治体内部での配置替えで来た人、ないしは学校教員の一時的な配置の方が多い。この本でも、まとめ役はそう

した方々ではなく、大学教員が務める例が多い。その意味で、沖縄の社会教育の継続的発展を担う人々をどうつくるかの課題があるように思われる。

同じことは、「沖縄子ども白書」についてもいえよう。執筆者は「子ども専門」でなく、各分野で働く人がほとんどで、事情が似ているからだ。社会教育にしる、子どもにしる、そうしたことを担いうる集団をどう継続的に築くかという課題が存在していると言えよう。

さて、本書は8年前のものなので、その後の展開にも興味をもたれるが、ここでは、本書の中で、興味を引いたいくつかについて、次回以降紹介しておこう。

沖縄の社会教育のメッセージ 『おきなわの社会教育』本2 (2009年4月26日)

編者の小林文人は、冒頭論文の中で、沖縄の社会教育の特徴を見事に要約して、次のように述べる。

「全体的な観点から、沖縄県の社会教育に内包されるメッセージを、問題提起として七点ほど取りあげておく。

一、社会教育・生涯学習の本質は住民の生きる意欲と結びついた自主、自治の活動であり、住民こそが社会教育実践の主体である。

二、集落（字、シマ）は住民の暮らしの地域単位であり、その協同と文化を再生し発展することと結びついて、集落公民館の重要な役割がある。

三、生産・労働・政治・文化などの諸課題に取り組むさまざまな住民活動、民衆諸運動のなかに、社会教育的（教育・学習・文化等）実践が胎動してきた。

四、地域の社会教育実践は、住民個々の期待に応えると同時に、地域おこし運動と結合し発展していく側面もっている。

五、公的な社会教育行政や公立公民館等の施設は、住民の取り組む学習や実践に奉仕（サービス）し、その豊かな発展に寄与し、それに必要な諸条件を整備していく責務がある。

六、社会教育関連の職員は、公的機関に配置され専門的役割を發揮してきたが、住民の自治組織・字公民館でも独自の体制がみられた。集落の関係者たちも、住民に寄り添い、住民活動の“接点”“触媒”となり、“いぶし銀”のような役割を果たしてきた。

七、地域の社会教育にはそれぞれの地域史があり、その蓄積のなかから地域社会教育の特質が形成されてきた。その歩みを記録し吟味し、発展と展望の方向を模索する上で地域史（字誌）づくりが独自の意義を担ってきている。」 P19

住民の立場、視点にたった優れた指摘で説得力溢れるものだ。そして、その背景として、次の指摘にも注目したい。

「沖縄教職員会による教育四法民立法運動や教公二法阻止闘争等だけでなく、沖縄子どもを守る会の活動、さまざまな地域青年運動、婦人会やPTAの活動など、社会教育にかかわる諸運動は、戦後沖縄民衆運動の潮流の一角を占めてきた。同時に、政治、基地、環境、女性、福祉等をめぐる諸運動のなかで取り組まれた教育・学習・

文化運動は、「大衆運動の教育的側面」（中略）としての社会教育の性格を含んでいた。たとえば、東西の冷戦構造、アメリカの極東戦略、ヴェトナム戦争など世界史のなかの沖縄についての自己認識、戦争と基地をめぐる論議を通しての「命どう宝」意識の形成など、さまざまな課題を契機とする質の高い学習・文化活動と意識変革が、沖縄の青年運動や労働運動のなかで取り組まれてきた事実はそのことを物語っている。そして、これらと拮抗し矛盾しあう関係で社会教育行政の性質もまた形づくられてきた側面もある。」 P13

そうした、住民からの、運動からの展開に対して、「公的」な取り組みはどうであろうか。その点について、次の指摘が注目される。

「復帰後の三〇年は、「本土並み」への格差是正に止まらず、「本土」からの沖縄復興特別政策が大きな勢いで流れ込み、社会教育・生涯学習の施策も（一定の近代的条件整備を伴ないつつ）上から下への流れを増強してきた年月でもあったのではないか。」 P17

いわゆる「ハコモノ」づくりが進展したわけだが、それを維持発展させるソフトにおける問題性を示唆している。にもかかわらず、復帰後も住民や運動側からの主体的な営みが、社会教育の実質を作り上げていることを本書のいたるところで示されている。

そこで、「公的な」社会教育関連職員が話題になるが、それにかかわって社会教育主事についての次の指摘がある。

「制度的基礎をもって社会教育主事の整備が進められるのは琉球政府社会教育行政によってである（一九五九年「社会教育主事の職務及び免許に関する規則」等）。その実態は、社会教育独自の専門職制度というより、学校教員からの登用、すなわち派遣主事としての各教育区への配置（一九七〇年当時で五五人）であった。そして日本復帰が近づくと「ほとんどが学校復帰」（沖縄県教育委員会『沖縄の戦後教育史』）していった。市町村・自治体それぞれの社会教育主事の配置ならびに社会教育職員集団の形成は、復帰後をまたなければならない。」 P16

このように、学校教師の役割は大きかった。私の見聞から言うと、「復帰」後も、事情は多少変わったにせよ、社会教育関連の仕事に配置される学校教員はかなりいた。

そしてまた、戦後沖縄の社会教育を担った諸運動組織にも学校教員が深く関わるが多かった。たとえば、次のような指摘がある。

「沖縄の婦人会で特筆すべき事は、リーダーとしての女教師の存在であろう。」 P177

「戦前がそうであったように、戦後の婦人会のリーダーもほとんどが学校教師であった。かつて軍国体制下で誤った指導をしたという反省もあって、女教師たちは「民主主義」を高らかに叫び、「男女平等」「女性の地位向上」をキャッチフレーズに婦人会をリードしていった。」 P179

しかしながら、近年では、諸運動にしても社会教育にしても、学校教師のかかわりの低下は著しい。このことをどう分析するかは、社会教育にとってだけでなく、学校教育にとっても、沖縄教育界にとっても必要なことであろう。

芸能 学校 『おきなわの社会教育』本4 (2009年4月30日)

注目したい事をいくつか紹介しよう。まず、芸能についての指摘。

「本土復帰以降しばらくは、特に祭祀・芸能が観光客などへ一方的に見せる祭祀・芸能へとやや停滞感があった。しかし八〇年代に入ると、独自文化の見直しの動きがはじまる。それは、自らの文化を本土に比べて劣っていると蔑んだ一部の見方から、それらはむしろ誇るべき文化の特異性として再評価に変わっていったことに起因する。その評価を先んじて実行したのが高齢者たちである。若者を叱咤激励して。一時は途絶えかけた地域芸能や年中行事の中の特に豊年祭などはそのいい例である。」P194

私の実感からもこの分析は賛成だ。それは、ウチナーグチと同じような流れだ。70年代は、まだ標準語奨励運動・方言撲滅運動が、地域でも行われ、そういうチラシが自治体から配られて驚いた経験がある。そういう流れに抗して、私もいろいろと論陣を張った、70年代、80年代前半だった。

そして、80年代に入って、変化がみえはじめ、さらに21世紀にはいって、芸能がもつ積極的な動きは、目をみはらせる。集落や自治体レベルでの芸能復活、創造の動きはすごい。また、ウチナーグチへの関心と学ぶ動きは、シマクトゥバの日制定に象徴されるように、70年代とは隔世の感さえある動きがある。こうした「隆盛」をどう分析し、今後の展開をどう構想するのか、そうしたことに関心が抱かれる。

また、本書の中に、私の長年の主張と全く同じ主張を見つけて、意を強くした。多良間の八月踊りについての小橋川共男の指摘だ。

「注目したいのは踊り場（舞台）の高さと見物席の位置。かつて沖縄市の知花公民館で舞台と広場（客席）の関係で、舞台は広場の客席から家の上り降りする程の高さでしかない事に気付いたが、新しいコンクリート造りの公民館となり立派な舞台がつくられると、その空間が何故かしっくりこず、とまどった事がある。もともと舞台と客席は一体ではなかったのか。演ずる側と見る側の一体感とは、舞台と客席との関係に大きく左右されるのではないか。

多良間の八月踊りの舞台は、まさにその事を力強く証明している。客席から立ち上がれば、その場も舞台になり得るのだ。それも舞台を中心に三面（三方向）から見る様に設営されている。この様な舞台の場を他の地域では残念ながら知らない。話を広げれば、座して輪となり、その中から一人が立ち上がり歌い踊れば、それが舞台の場となったのではないか。毛遊び（野外で唄い踊り遊ぶこと）は、そこに三線の楽器が加わった世界であろうし、形態が進むなかで八月踊りでは三面が残り、一面は地謡のズーニン座の場となったのではないか。そこに色濃く一体感となる演出が創り出され、生き続けてきたと見る。」P74

こうした演じ手と観手との関係とか、場の配置等について、私は70年代後半からいろいろと実践し、書いてきた。たとえば、『学校を変える 学級を変える』（1996年青木書店）。こうした創造が増えていくことを願う。

もう一つ、驚きつつも、「そんなことはありそうだな」と思ったのは、次の記述だ。

「ある高校の進学校で、生徒の進路指導に関連して、地域の産業や企業への就職指導について尋ねたことがあったが、教師の回答は「うちはそういう価値観はもっておりません」というものだった。「本土並」「追いつき追い越せ」という論理は、外見的な、今日ではグローバリゼーションの経済発展の論理と共通する。」P235

私の「沖縄おこし 人生おこし」の主張の対極にあることが、学校現場では行われているのだ。先日も、入学試験に合格して、センターテストを受験する必要のない生徒に、無理やりセンターテストを受験させる例を複数

の高校で聞いた。1970～80年代に、本人の意思とはかかわりなく、琉球大学を受験させた九州の多くの高校があったことを思い出してしまった。国立合格者を増やすためだ。「地域おこし 人生おこし」とは縁遠く、その高校の「実績」づくりというバカバカしい話がいまなお存在しているのだ。

字評議員になって半年 畑地かんがい 行政事業の流れの変化 (2009年11月18日)

4月に字中山の評議員になった。必要な時に随時集まるが、だいたい月一回ぐらいだ。定刻は夜7時30分開始で、ほぼ全員この時間に集まる。沖縄タイムではない。そういえば、30～40年前よく聞いた「沖縄タイム」という言葉はほとんど聞かなくなった。なぜだろう。

いくつかの報告があり、1～2の協議事項があるのが普通だ。市などから持ち込まれることへの対応というのが多い。今回は、「畑地かんがい施設」問題だ。中山地区の畑地のために、上方に貯水池をつくり、そこから配水管を設置して、畑をかんがいするものだ。市の担当者が説明にくる。

こういう事業の従来は、国・県・市が企画立案して、地元が受け入れるかどうか判断するというものだったらしい。しかし、今回からは、地元の「受益者」が集まって、組織を作り、行政に設置を要請するスタイルに変わったという。だから、受益者の集まりというわけではない字常会に、市の担当者がきて説明するわけにはいかない、ということだ。

この地域の畑地は、中山の農業従事者が所有しているのは少ない。地区外の方の所有地のほうが多いのだ。そういう方々の代表者が集まって組織を作り、行政に申請を出すという流れになるらしい。しかし、こういう流れは、未体験のようだ。事業費用の大半は、国・県・市の補助金で賄われ、受益者負担は配水管敷設の4.5%だけというわけだが。

流れの変化を感じる。私は畑をもっていないので、当事者ではないが、当事者の方々はどのように進めていくのだろうか。

字評議員会の終了後は、ミニ飲み会になることが多い。自由な語り合いで、結構面白い。話があっちこっちするが、こんなところで、中山の地域づくりの話が盛り上がりたりする。

読谷村座喜味の字誌を読む (2010年1月10日)

12月に出たばかりの、座喜味区字誌編集委員会編「史跡乃里 (区制100周年)」(2009年座喜味公民館発行)をいただく。A4サイズ500ページの大部なものだが、興味深いので早速目を通す。

研究者が関わって作成するタイプの字誌もあるが、座喜味のものは、字住民自身が書いたものであり、また、やさしい文章で、親しみがもてる。座喜味城址があり、それが字のよりどころでもあるので、時代をさかのぼる記述も多いが、中心を占めるのは、健在の方々からの聞き取り、あるいは、ご自身の執筆からなるので、昭和戦前期・戦後期の記述だ。また、字内の各種団体の活動状況などを網羅するなど、現在につながるものも多い。い

ってみれば、「身の丈」にあった、というか、身の丈100%の本である。その意味でも好感が持てる。

戦中の労苦、戦後初期の労苦、あるいは、基地との絡み、仕事・産業起こし、地域おこしなどもわかりやすい。そのなかでの、人々の暮らしの激変、あるいは願いの継承と変化が伝わってくる。そのなかでも、1995年にたてられた次のような「ムラづくり計画」は、私には興味深い。

ヌチ花のザキミづくり、島まるみの瓦茶屋づくり、ジンジンとタナガーの川づくり、風水のしまづくり、人情豊かな環境と文化づくり、という5部会の計画が紹介されている。

座喜味に限らず、沖縄の字は、ここ70年、激変の時代だった。戦争前後だけでなく、戦後も、たとえば、農業主体から「勤め人」主体への変化、人口の爆発的増加、転出入の恒常化、暮らしの形、学校教育の比重の増大、高齢者人口の増大、「旧住民」と移住してきた「新住民」との関係など、あげていけば、きりが無いほどの変化だ。そうした変化のなかで、字（シマ、ムラ）の変化も著しく、字によっては、解体の危機を抱えているところも多い。そうしたなかにあつて、字誌編集発行が、こうした変化をとらえ直し、また、そのなかで浮かび上がってくる課題を明らかにし、今後への展望を考えるきっかけを生み出していくだろう。

その意味では、字、そして字住民が作りだしてきた物語を、さらに掘りだしていく作業が期待される。たとえば、平均的な個人、家を選んで、〇〇さんの一日（1965年版、1995年版）、▽▽さんのお家の一年（1955年版、1985年版）を描くとか、1970年座喜味物語を描くとかである。あるいは、「□□さんの80年」があってもいいだろう。そんな物語をヒントにして、小中学生が、「座喜味〇〇物語」を実地調査と聞き取りで作成するとか、「2025年の座喜味と私の物語」を描くと、面白いものになると思うのだが。

それにしても、活力あふれる座喜味だからこそ、こうした字誌ができるのだろう、と思う。感謝と尊敬の念を表したい。

23. 文化・芸能

沖縄県立博物館・美術館訪問（2008年1月6日）

今日、恵美子とともに見学。11月に開館したばかりの真新しい建物。開館企画ということもあって、沖縄の美術の歩み、歴史の歩み、そして港川人をめぐっての人類史がメインであった。

沖縄のもつ豊かさを知り味わおうとするものにとって、「入門編」として大変有効であろう。子どもたちや沖縄以外からこられた方にとっては、沖縄入門のいい場所となろう。ここ20年くらいで、各地の博物館は、古色蒼然たる雰囲気から、子どもたちを含めて「初心者」にもなじみやすくわかりやすい構成に様変わりしたが、ここでもそうである。

とはいっても専門的な関心をもつ人にとって、あるいは問題発信を求める人にとっては、物足りなさが残りそうだ。その意味では、今後の展開が期待される。たとえば、美術館は、沖縄美術の歩みを概観するにとどまらず、どのような創造的美的発信をするのか、という角度からの今後の展開が期待される。全国美術館にある、とても高価な著名作家の作品を収集展示することはおそらくできないであろう。そうではなく、沖縄ならではの発信が期待される。そしてそれは、沖縄美術の創造的展開にどのようにコミットしていこうとするか、そんなことをみつけながら、今後を期待したい。

美術館にしても博物館にしても、個人的には「懐かしく」振り返る展示物があった。1990年まで勤めた琉球大学での同僚たちの美術作品に懐かしく接した。「あの先生は若いころこんな絵を描いていたのか」「そういえば、この先生の作品を一ついただいたなあ」といった具合に。

もう一つ、新都心に位置するためだろうか、えらく都市的雰囲気をもつ施設だ。そして、「あかぬけ」しすぎていて、沖縄的雰囲気がにじんでこない。沖縄の風土・文化が、「鑑賞物」と化しているのではないか。

それにしても、新都心にでかけるとお金がかかる。この施設で食事をしようとしたが、3階にカフェがあるだけだ。食事はなく、高級コーヒーがメインである。多くの博物館・美術館が、施設をじっくりと時間をかけて見ようとする人々に役立つ、安価なレストラン・カフェをもっているのとは対照的ですからある。また、入館料も全国の類似施設と比べて、かなり、というか、ひどく高価である。

その意味で、この施設が、生活文化的にどのような位置を追求していこうとしているのか、そんな問いをしてみたくなった。

ウチナーグチ抑圧とウチナー音楽隆盛（2008年1月6日）

ウチナーグチを抑圧禁止する政策が明治後半に盛んに行われ、悪名高き方言札も登場した。その同じ時期、村芝居、ウチナー演劇が広がり盛んになる。沖縄民謡も盛んになっていく。そこでは、学校教育とは対照的にウチ

ナーグチが使われる。

このことをどう考えるのか、このことに、私はまだ考えが深まっていないので、多くの人に教えてもらいたいと思っている。

近藤健一郎編『方言札——ことばと身体』(社会評論社2008年)には、この時期の沖縄における言語教育問題と音楽(教育)問題にかかわる論考がおさめられているが、この両者を対比する研究ではない。最近、こうした分野に、若い研究者が続出しているので、期待している。

この問題から派生、ないしは関連する問題には、いろいろある。たとえば、

- 1) 西洋音楽と琉球音楽との関係。この分野は、宮良長包研究などの蓄積は存在するが。
- 2) 琉球古典音楽舞踊といわれるものと明治期に広まる「民衆」音楽・演劇との関係。
- 3) 明治末期におこなわれた風俗改良運動は、沖縄演劇などを抑えるものがあったが、それがどうなっていったか。
- 4) 明治末から人々の服装に変化がうまれてくるが、このことと、以上の問題との関係。たとえば、舞台上で三線をする人の服装が、私には気になることが多い。
- 5) 沖縄の西洋音楽におけるクラシックとポップ・ジャズなどの関連。それらと沖縄音楽のからみ。
- 6) 今日、ウチナーグチの「さびれ」状況と対照的に、沖縄音楽は隆盛の「極み」とでもいえそうな状況にある。明治期以降も含めて、その後の展開をどう考えるか。
- 7) こういう状況と、施策、教育界、人々の動向と関連
- 8) 今後の創造の課題・展望

ついでにいうと、シュガーホールにおける、わけても町民・市民ミュージカルは、こうした問題への大きな実践的挑戦のようにも見える。

いろいろとわからないことばかりなのに、興味をひく問題が私の前で行列している。そして、こうした問題の追究には、これまでの研究のアプローチや枠組みでは難しく、新たなものが要求されているとも感じている。

クイチャー (2009年8月23日)

「別冊『環』6 琉球文化圏とは何か」(藤原書店2003年)のなかの、下地和宏「琉球文化圏の中の宮古文化」という論文がある。

ミヤクムクの私だが、宮古文化をあまり知らない。クイチャーについても、話は聞くが、実際に見たことは、ゼロに近いし、きちんと踊ったことは当然ない。だから、ごく常識的なことであろう、次のような説明も勉強になる。

「クイチャーは声を合わせるとの意であるが、クイを乞い願うとの見方もある。歌はクイチャーアークといい、踊りはクイチャーブドイという。たんにクイチャーといえは一般的には踊りのことである。集団円陣舞踊であることに特徴がみられ、主役はおらず、歌い手・踊り手のひとり一人が主役であるとの発想である。琉球の宮廷舞踊とは大きく異なり、その影響もみられない。」

私は、このような特徴に強い関心をもち、その歴史的由来、そして今後注目していきたい。

奄美—沖永良部—沖縄の歌・踊り 「踊り手」と「観衆」（2009年8月22日）

「別冊『環』6 琉球文化圏とは何か」（藤原書店2003年）のなかの、前利潔「文化的ホットスポットとしての奄美諸島」である。

私にとっての沖永良部は、10年ほど前、教育実習生の実習校訪問で、沖永良部高校を訪問した付き合いだけだ。大変ゆったりしたところであり、夜中までの中京大学卒業生との語り合い、そして強烈に楽しい数々の思い出をつくってくれたタクシー運転手福さんとの出会いがあった。と同時に、ユリやクロッカス栽培などで経済的に意欲的であるおっている島だった。また、なぜだかわからないが、宮古とのつながり・親近感を聞くこともあった。それらの話はいつか書くことがあろう。

さて、この小論は、奄美について、奄美と沖縄とのつながり・差異を、沖永良部を焦点に述べている。いくつか引用してみよう。

「カムイヤキの時代の奄美諸島は、日本本土の中世国家の勢力、東アジア社会のエネルギーを背景に勃興しはじめた沖縄のグスク時代の勢力、そして朝鮮半島の勢力が交錯するホットスポットだったとも考えられる。

日本の古代から中世にかけて、日本本土の影響を強く受け続けていた徳之島以北と、グスク時代から沖縄本島の影響を強く受けていた沖永良部島、与論島とでは、現在でも「奄美」という言葉ではひとくくりできない大きな裂け目が存在する。」

奄美の多様さ、南西諸島の多様さを見るうえで、重要な視点といえよう。

次は、踊り・音楽にかかわる、小島美子「音楽から見た日本人」によるものだ。

「徳之島まで南下している民謡音階」「中国か東南アジアをルーツにもつと思われる沖縄音階は、琉球王国の勢力圏に乗って、沖永良部島まで到達した。」

次は、高橋孝代の研究によるものだ。

「高橋は、沖永良部島では近世末から近代にかけて、踊りの場において「踊り手」と「観衆」という役割区分が明確になり、「舞台上演」というスタイルが定着してきたと分析している」

「奄美大島の八月踊りなどにみられる「踊り手」と「観衆」の役割が未分化で、「観衆」も臨機応変に「踊り手」になることができる踊りのスタイルは、沖永良部島の芸能の「典型」ではなくなると、高橋は指摘する」

この「踊り手」と「観衆」という問題には、1970年代末よりずっと、強い関心を持ち続けてきた。私自身は、両者を意識的に区分しないで、融合して展開することを重視し、私が演出するものは、必ずといっていいほど、そうしてきた。詳しいことは、私の『学校を変える 学級を変える』（1996年青木書店）などを参照していただきたい。

「徳之島以北には、「八月踊り」とともに「六調」がある。八月踊りが伝統的な集団の踊りであるのに対して、六調は歌遊びなどの祝いや集いで、その場の締めとして踊られる。六調は定型化された踊りではなく、乱舞とい

っていい。沖縄のカチャーシーと現象的には似ているが、ルーツはまったく違うようだ。六調は本土から南下してきたものだといわれ、これも徳之島で止まっている。」

これら即興性の高い踊りにも、わたしは強い関心を抱いてきた。その点で、これらの指摘には注目したい。先日、八重山出身者の多いところで、「六調」が踊られたことに驚いた。八重山にはずっと「六調」があるそうだ。

こうした踊りは地球上の各地にあるように思う。私個人の経験では、ネパールのボカラ、カナダのトロントで、ネイティブの人たちと踊ったことがあるが、いずれの踊りも、私の踊るカチャーシーとうまく合った。それはなぜなのか、も考えたいことだ。

矢野輝雄「沖縄芸能史話」(榕樹社1993年)を読む(2009年9月3日)

歌三線にしろ、琉球舞踊にしろ、民俗芸能にしろ、そしてカチャーシーにしろ、日常的に触れている。でも、その歴史は知らない。何かの踊りがどんな由来で、いつ誰がつくり、どのように変化してきたのか、といったことも、ほとんど知らない。たとえば、安富祖流と野村流の違いは?といったら、さっぱりわからない私だった。

それでも、沖縄の様々な芸能は、過去、現在、そして未来にわたって私は興味津々だ。だから、私の「沖縄県の教育史」でも、当時の私に可能な範囲でふれた。とはいうものの、まったくの勉強不足だ。そんなことが学べる芸能史を書店で探していたら、私の興味関心にぴったりのものが見つかった。1993年新訂増補版で、もともとの初版は1974年だという。とてもわかりやすい。素人の私にも取っ付きやすい。唯一の難点は、5900円という価格だろう。仕方がない。

この本が描いている世界を、キーワード的に、単語を列挙しよう。

かぎやで風 オモロ 長者の大主 京太郎 赤犬子 組踊 女踊り 湛水流 箏曲 雑踊り 歌劇 泊阿嘉 珊瑚座 玉城盛重 伊良波尹吉

三線が中国から入り、それが沖縄独自の発展をしてきたことはよく知られている。また、中世日本の念仏と結びついた芸能が、沖縄にも入り、京太郎などのように、独自の展開を見せてきたことなども書かれている。また、明治期には、「沖縄口という関門と口立てという上演方式は、巧みに大和演劇を土着的なものへと転換していった。いわば沖縄語という触媒によって、大和芸能が完全に沖縄的なものへと変容し転化させられて行くのを見ることができる。」p256と書かれている。

こうした海外とのかかわりのなかで、沖縄独自の芸能をつくりあげられてきたことは、よく知られている。

わたしがもう一つ着目したいのは、沖縄内にあつて、士族などの芸能と民衆の芸能の間関係、とくにそれらの相互移行についての記述である。たとえば、村芝居の「長者の大主」が、貴族たちの盆行事、そして国家儀式にとりいれられ、変貌していくことの記述。そしてまた、組踊りの原型になった村芝居の「長者の大主」が、再び村芝居のなかに戻っていくといった指摘は興味深い。

そしてまた、「組踊りは市井の人たちの娯楽として根を下しながら、一方では形をかえて歌劇や史劇のなかに新しい芽をふきはじめる。明治の商業演劇の時代は、組踊りの衰退の時期ではあったが、組踊りから多くのものを吸収しながら、史劇や歌劇などを中心とする新しい演劇の世界がめばえた時代であり、いわば組踊りの庶民的な

再生の時期でもあったのである。」P144～5

大変強烈な指摘だ。

庶民参加による芸能創造 「沖縄芸能史話」 続き (2009年9月3日)

芸能などは、当然「庶民参加による芸能創造」だといわれそうだが、そうであるにしても、沖縄の場合、その色が濃いことは強調したい。

この本も、「泊阿嘉」にかかわって、こう述べる。

「歌劇の場合は、民謡を基盤とすることにより、組踊りよりもさらに親しみやすいものとなり、大衆のなかに根をおろした。そこでは、組踊りのもつせりふと音楽の一体性が、古典音楽と民謡にのせたせりふの一体性におきかえられ、より庶民性を増し、土着性を強めつつ民衆の中へ入って行った。」P299

そして、この作品のなかには、アマチュアによってつくられた箇所があることを紹介している。また、この時代、つまり大正時代の観客は、辻の遊女、帽子編みの女工、町屋の主婦であったことを紹介している。

また、明治20年ころに盛んにつくられた雑踊りについて、「雑踊りこそは、大衆の生んだ舞踊であり、しかも今日なお準古典として高い評価を得ている庶民芸能の華である」P235、としてその特性の指摘を行っている。

特に私が注目するのは、「従来の古典舞踊では、三人なり四人なりが一行に並んで同じ手で踊ったものであるが、雑踊りでは、四人が一行に出て、輪のように回ったり、あるいは向いあって踊るなど、群舞としての美しさを作り出している」P235、といった指摘である。

それに関連していうと、17世紀から18世紀にかけて、御冠船の踊りでは、「集団から個人へ、戸外から室内への変化」があり、また三人、四人が同じ手で踊るということは玉城朝薫が始めたことだという。

また、シヌグの最後に、自由形の踊りがあり、それが「女たちにとって大きな喜びの歌であ」ったという。P40

そんなシヌグが首里王府によって禁止されことを嘆く歌が恩納ナベによって歌われたという。この点に関連して、その時期に、「古代物語的、和歌的恋愛至上主義が、封建倫理によって排除されようとしている」ことに触れている池宮正治を引用している。こうしたことは、私の「沖縄県の教育史」でも多少言及した。

こうした、芸能における民衆と支配との関係に着目することは重要である。

組踊観劇 (2009年10月4日)

今回の主催は、沖縄県芸能関連協議会。多様な芸能団体・個人が参加している団体だ。その役員・事務局に知人がいることをきっかけに観劇したのだ。タイトルは『『執心鐘入』からのひろがり』で、組踊にくわえて、講演・琉球舞踊・日本舞踊・バレエも加わった。

三隅治雄さんの講演は、『執心鐘入』のことに加えて、今回、琉球舞踊が日本舞踊などにさきがけて、なぜ重要

無形文化財に指定されたか、など興味深い話だった。『執心鐘入』については、「娘道成寺」とのストーリーの違いの話が、興味深かった。「女」の「愛」の物語の差異に焦点があてられていた。

このあたり、さらにその継承展開については、私は勉強不足状態にある。

演目の最初は、重要無形文化財に指定された琉球舞踊のかたたちの「かぎやで風」だ。こんな豪勢な方々のそろっての出演にびっくりだ。

組踊そのものは、楽しく観劇した。30年前、声楽家の城間繁さんからの誘いで見た。当人も出演なさっていた。その時は、全くの琉球芸能初心者の私にはチンプンカンプンだった。今回は、多少は「ついていけた」感じた。ストーリーやセリフなどは、非常に簡潔だ。無駄がない。それだけに、どのようなメッセージを受け取るのか、多様であろう。

そして、琉球舞踊、日本舞踊、バレエの方々それぞれによる、主人公の女性についての創作舞踊があった。迫力満点。

こうした試みは意義深いと思う。異なるジャンルからの協同は、あらたな世界を切り開いて行くだろう。

貴重な公演にしては、観客が少なかったのは、もったいない。行事が盛りだくさんの日だから、難しかったのだろう。

また、観客の大半が女性であったのも、一つの特徴だろう。

写真は、国立劇場おきなわ



24. 自然

沖縄は気圧が低くて、自律神経失調症にいい 琉球大学本3 (2008年9月4日)

※ 琉球大学編『やわらかい南の学と思想』(沖縄タイムス社2008年)

平良一彦「浦島太郎と龍宮城に行こう」のなかに、こんな記述があった。(P209)

「気圧も日本本土比べて幾分低いのです。時折襲うあの台風は熱帯性低気圧の親分で、あの台風には困ったものですが、時間の流れがゆるやかに感じられるこの島では自律神経のバランスにもいい影響が期待され、気圧が幾分低いことで副交感神経が優位になりやすいことが示唆されています。これらの気候の特徴もこの島の持つ癒しの力に大いに関係があるといえましょう。」

はじめて知った。興味深い。

難しいが、たいへん示唆に富む自然関係論文 琉球大学本5 (2008年9月4日)

この本の第5章は「沖縄の自然」、第六章は「沖縄の自然災害と建築」、第七章は「医と健康」だ。自然科学の心得のない私にとって、難しい個所、理解のできない専門用語が多いが、知らないことばかりだけに、示唆に富む記述がたくさんだ。たとえば、次のように。

1) 「黒潮の流量」は「アマゾンの流量のおよそ100倍」(P294)

2) 「地滑りは地下水上昇の影響で地中の粘土岩などの滑り易い層を境にしてその上の不安定地盤が滑り出す物理的現象であります」(P339)

2)については、我が家の建築の際に、粘土岩を数メートル掘って鉄筋コンクリートの基礎工事をした理由が、より深く理解できた。

他にも、骨やウイルスを通しての「沖縄人の歴史」「太古のヒトの流れ」の研究など、興味深いものが多かった。

もう一つ、沖縄の薬草の研究は、私自身が関心をもっているものなので、それは次の記事に書くことにする。

安仁屋洋子『沖縄薬草と抗酸化作用』 琉球大学本6 (2008年9月4日)

沖縄薬草を抗酸化作用の視点から書かれている。この本で、沖縄産の野菜としてあげられているのは、ヨモギ、ボタンボウフウ（サクナ、長命草）、ウコン、グアバ、ニガナ、カラシナ（シマナー）、黄色いニンジン、エンサイ、ニガウリ、ベニイモである。

うれしいことに、黄色いニンジン以外はすべて我が家の畑で育てている。

一般的な食材の野菜、キャベツ、ホウレンソウ、お茶などと比べてみて、沖縄産の野菜のほうが、抗酸化作用を有するものが多いとのことだ。紫外線が強いところで育つので、沖縄産野菜は、抗酸化作用が強くなるのだそう。

他に、知らなかったことという、モモタマナ、つまりクローデューサーが、強い抗酸化作用、抗菌作用をもっているとのことだ。このでっかい木を植えたい気持ちもあるが、木々で満杯状態の我が家の庭・畑に植えるのは、他の木や畑を犠牲にしなくてはならない。どこにでもみられるので、そこから葉っぱをとってくればいい、とは思。